

四六 堂上下向、多田弥太郎らの消息

上田市立博物館旧文書

一筆啓上仕候、秋冷相募申候処、益御安恭被成御勤奉
恐喜候、然者中条右京々書面、井上藤兵衛江向ヶ差立
候由ニ而同人々今便差立候ニ付開封仕候処、御手前様
方御名前茂御座候付、懸差主申候、御落手御披見可被
成候、御所内誠大変、七人之堂上長州江御下向相違無
御座、弥太郎・甲太郎(德以下同)義も一旦大坂江罷出候得共、三
条西様被仰出候儀も有之趣ニ而、長州江罷出候趣之書
状、弟金四郎持参仕候ニ付、助太夫殿江差出置申候、
定而御承知被為在候義と奉存候、右之段申上度如斯御
座候、猶後便可申上候、恐惶謹言

八月廿九日認

堀 丹宮

仙石織人様

早川庄兵衛様

四七 多田の上京、仙石家の名折れになるやも

上田市立博物館旧文書

以書面啓達仕候、冷氣之節弥御安恭被成御座、珍重之
御義奉存候、然者多田氏々此方出之書面只今著仕候之
處、尤此度之次第者不存候様子ニ御座候、右ニ附、主
殿之義、為皇国之誠忠之処、依之是迄主殿へ御面会之
諸藩、其外出入茂無之人々、当所ニ有之向申ニ可及面
々之在所ニ有之人々迄茂上京ニ而参殿可被致之事、依
之多田此度上京茂私之心ニ而者其御主仙石家之御名折
ニ茂相成様子候、拙者々茂以書面申入候、猶又荒木様
江茂御申上之上、早々御国方御申被入候様奉願候、右
御上京茂無之候時、姉小路殿一門沢主水正殿へ茂、并
大坂御謁見之節、諸藩一般人々へ茂面目茂無之候間、
依之申入度旨 如斯也、

仲月廿一日

四〇八 多田弥太郎討留届出書 (元治元年四月七日)

御名元家来
当時浪人
多田弥太郎

右之者去亥八月十八日於但馬国出石表出仕候処、当二月廿八日同国養父郡宿南村ニ而、兼而為探索差出置候讚岐守家来之者召捕、出石郡暮坂村迄召連罷帰候処、途中及乱妨手余り候ニ付、無抛討留右死骸在所江引取置候旨申越候ニ付、此段御届申上候、以上

三月十四日
御名家来
平尾吉右衛門

四〇九 年寄・中老ら減知免職、仙石銳雄謹慎

『仙石家譜』久利公譜

(元治元年)
三月十四日、仙石織人・早川庄兵衛・中老堀丹宮役儀赦免、織人ハ五十石減知城代席、庄兵衛ハ蟄居家督八十五石与へ、丹宮ハ二十石減知物頭格を命し、且銳雄へ五日間謹慎閉門を命す

*多田弥太郎暗殺の挙に対する藩主久利の怒りの表現で

あろう。幕府へ届け出たと同じ日に、この処分が発令されている。当時久利は出石に在城中であった。

4 幕末期、揺れる出石藩政

四一〇 出石藩、鞍馬口・下鴨口警衛

(元治元年四月十一日)

仙石讚岐守

鞍馬口・下鴨口御固、丹羽左京大夫御免、代其方江被仰付候間、可得其意候、尤生野表江差出置候人数は引払候様可致候、

四一一 加藤弘藏、開成所出向許可 (元治元年七月十四日)

進啓去月廿八日御老中様井上河内守様御留守居御呼出ニ付、吉右衛門罷出候処、別紙之通御書付御渡有之候ニ付、請置罷帰、左之通御談申上置候段申達、

仙石讚岐守家来
加藤弘藏

二 御用部屋日記

右之者開成所御用ニ付被召出候而茂差支之筋無御座

哉、御尋之趣讚岐守江申聞処、在所罷在御請之儀

日数延候付、此段各様迄申上置候、以上

五月廿八日

御名家米

平尾吉右衛門

右ニ付弘藏呼寄存意之処承候処、上辺思召任セ候段申聞候、此段御伺被下否公^(アツ)辺江御答様被仰下候様奉存候、

右依田市右衛門・竹村十字^ノ書面京都ニ而稻垣広門披見、

依而右書面ニ附札ニ而申来、左之通

前書之通申来り居候付、広門着府之上、上江相伺候処、思召茂無御座段被仰出、則別紙之通御留守居御届書差出之、此段存候事

御書取写

仙石讚岐守家来
開成所教授手伝出役

加藤弘藏

右之者開成所御用ニ付、被召出候而茂差支之筋無之

哉、相尋候事

御届書写

御名家米
加藤弘藏

右之者開成所御用ニ付、被召出候而茂差支之筋無御

座候哉、御尋之趣讚岐守江申聞候処、差支之儀無御

座候旨申付候、此段各様迄申上置候、以上

六月廿五日

御名家米

平尾吉右衛門

四二 出石領内番所設置令 (元治元年六月二十九日)

御所司代^ノ御達書

丹波・丹後・但馬

右三ヶ国ニ領分有之面々、自国夫々嚴重ニ相守、国々海道筋往来之旅人急度相糺、休息往来可為致候間、急速在所表江可相達候事

六月廿七日

一 左之通御用人を以申談

米地村江

高田十郎左衛門

間中紋太郎

御郡組 菅人

久畑村江

小川悦太郎

鳥居虎太郎

御郡組 菅人

浅間村江

岡木順吉

渡辺能十郎

御郡組 菅人

藤ヶ森村江

臼田八之進

汀 範介

柴田三平

小坂江

重田鉄弥

井上草造

藤川市平

宵田村

奥小野村

西谷村

奥野村

伊豆村

奥山村

村役人

番人

京都表此節不容易形勢相成候付、丹波・丹後・但馬之国々御領分有之候御方江往来之旅人吟味方、分而御達ニ付、右之口々江罷出縮り筋被仰付候事

但、右ニ付、十日ツ、交代被仰付候事

一 右ニ付、町方宿屋々江印形持參無之もの旅宿為致間敷旨申談置候間、他所旅人と見請候へ、相糺候場所ニ於て印形相渡可申事
一 旅人不審之体ニ見請候へ、行先見かくれニ附候而
出石表江可申達事

一 若し多人数手余り候程之義迄及候ハ、急使を以
出石表江可申達候事

四三 京都出張兵員数并合印書付差出書

(元治元年七月十四日)

一 御所司代松平越中守様より出張人数并合印書付差出
候様御達ニ付、左之通差出申候、

一 並旗 白絹二幅 紋紺永楽銭

一 使番差物 二紺一白 段菊

一 平士差物 白絹輪切裂

一 大銃方 紺地白永楽銭 裾筋違白一本颯

一 徒士差物 浅黄絹吹貫

一 鉄砲足輕 紺地白永楽銭 二本颯

但、小頭共

一 長柄足輕 同三本颯

但、小頭共

右之外役騎之面々自分差物

但、徒士以上惣体袖印白木綿永ノ字

惣家中

一 鎗印 狸々琲

右之通御座候

御名家米

麻見四郎兵衛

一人數之儀は中川修理大夫様御留守居江差出、取集之

上御所司代江差出候事、書付左之通

覚

一 侍以上 四拾人

一 小役人・徒士 八人

一 小頭・足輕頭 六拾七人

一 中間類 三拾四人

ノ百四拾三人

右之通御座候

七月

御名家米

麻見四郎兵衛

四四 警衛分担場所届出 (元治元年七月十八日)

当時被仰付置候御場所

一 京都下鴨口・鞍馬口御固

一 但馬国生野御代官所其外最寄御料所御警備

一 但馬国美含郡御料所共一円海岸御固

一 丹波・丹後援兵^(差力)□出方

一 但馬国旅人往来敵重礼方

一 御当地呉服橋御門番

右之通ニ御座候、以上

七月

御名

四五 蛤御門の変につき、番所警備強化

(元治元年七月二十日)

一 左之通御目付江申談

京都表長州藩御所江向、不容易及所行候付、御固

之御方様接戦ニ押移候趣申来、恐入候次第ニ候、

依之何時急速御用向茂可有之哉難斗候間、銘々其^(前)

心得可罷在候、

右之趣、御家中江各々々可被相達候、以上

七月廿日

荒木頼母

御目付中

一 左之ヶ所江明日々見張り番差出候付、夫々御用意之

儀、御用人并兩奉行江申談、

谷山口

谷山御番所

鉄砲町口

鉄砲町御番所止メ河原町茶屋

七軒町口

町家

鍛冶屋村口

在家

日野辺村口

新橋御番所

一 明日日々出仕致し候間、向々江申談候儀御目付江

申談、

一 一夜四ツ過退出

(元治元年七月二十一日)

一 左之通御目付を以申談、御用人江茂申聞候様申談、

米地村江

宵田村
奥小野村
西谷村
奥野村
奥山村
村役人
番人
右兼而申談置候通、猶更
入念取締候儀可申談旨、
御郡奉行江申談、

久畑村江

岡部平馬
依藤左右藏

長岡市兵衛

高田十郎左衛門

浅間村江

白田八之進

重田鉄弥

藤ヶ森村

中嶋彦十郎

小林新十郎

小坂村

早川卒一郎

井上草造

伊豆村

土岐貞五郎

杉本 含

右之通口々江罷出、取締筋之儀、去月廿九日申談候
様相心得可申旨、

四六 久畑村など三か所見張番引き揚げ

(元治元年八月二十日)

久畑村・米地村・伊豆村

右見張番、御都合之儀有之ニ付、当分之処引揚候儀、
尤御番所ハ其儘差置、村役人ニ而相心得可申事、時宜
ニ寄、出張可被仰付儀も可有之候間、兼而其旨相心得
可申事

四七 竹田町周辺、一揆情況報告

(元治元年八月二十六日)

一 昼後、堀田反爾宅江罷越、昨夜上郡竹田町岡田屋又
三郎江近在之百姓共多数仕、遂打潰シ、追々乱妨
之所業有之趣、和田山村九郎左衛門ハ申越候旨申達、
一右ニ付、養父郡辺江為探索御郡組并番人差遣、様子

注進候様御郡奉行江申談、

一米地村役人々村継を以、竹田辺和田山村江追々及強
訴候趣、注進申越候段御郡奉行申達候ニ付、猶得斗
取調様子見聞致、注進候様御代官宮原弥兵衛儀、急
速差出候様申談、

一右動揺之様子ニ寄、御人数被差出候儀も難斗ニ付、
何時ニ而も出張相成候様、用意可罷在旨、左之面々
江内意申聞

磯野但見

中村又太郎

一米地口・浅間口江見張番御侍急速差出候様、御目付
江申談、御用人御郡奉行江申聞候、

(元治元年八月二十七日)

一昨廿六日曉、百姓共四百人斗リニ而竹田町岡田屋と
申方二軒打潰シ、西枚田村酒屋一軒并此朝四ツ過比
和田山村太右衛門打潰し、夫々竹田村之方へ引返し、

其内生野御役人出張、并竹田辺七ヶ寺之寺方取扱ニ
而先ツ納得致し候哉、百姓共退散致し候様子ニ御座
候段、出張之宮原弥兵衛聞取書面を以申越候由、
御郡奉行今早朝申達、并和田山村九郎左衛門も同
様之趣ニ而、先ツ退散之由堀田反爾方へ申越候段同
刻申達、追々之注進も同様申來、

(元治元年八月二十九日)

一上郡辺屯集之百姓共及退散候付、宮原弥兵衛昨夕引
取候処、生野表江御用向も有之、且昨日生野々出張
之役人中々申越之儀も有之候間、今早朝引返し罷越
候様昨夕申談、今曉罷越候段御郡奉行申達、

一竹田辺江強訴ニ及ひ候百姓共之内、今日比召捕手配
り之様子も有之ニ付、昨日弥兵衛方家出張之地役人
々申越候趣有之故

選任にて

足輕五人

右支度次第早々弥兵衛出張先迄差遣候様可申談旨、

御用人江申談、暮時過出立之由、

一 和田山出張之宮原弥兵衛并米地見張番白井驕太郎

申越候趣も有之候ニ付、猶又

御侍

長岡市兵衛

四八 初午の節、追手門外に御旅所

(元治二年正月二十四日)

左之通、御用人御目付江申談

当年之処茂初午之節稻荷追手御門外江御旅所ニ相成候付、左之通

一 一月三日と六日迄追手御番所江守城手組大銃懸り戦士之内より五人ツ、昼夜不明様相詰候事

一 右非番之内と四人ツ、東西御門、并内町其外町方度々見廻り可申事

一 追手東西御門江守城手組之御足輕ニ而相詰、御番所詰并張等可致事

一 追手御番所江御番士之後口通り江御屏風相建、鉄砲

拾挺御飾之事

一 四日・五日は御用之外は町在之者とも御門内江堅く

入申間敷候事

守城手組御小姓組大銃懸り戦士、并守城手配三御門

御番士ニ而

一 御城下入口五ヶ所江見張番被仰候事

右之通、向々江可被申談候旨

* □で囲んだ箇所は、削除の意か、強調の意か不明、なお一八六三年(文久三)九月から、一八六四年(文久四・元治元)三月までの『御用部屋日記』は紛失して、前年度の初午祭御旅所の記事は不明、追手門外御旅所は一八六四年から設置が始まったのであろう。

四九 仙石恒之助廃嫡、仙石銳雄養子願

(慶応元年五月二十七日)

覚

私妾腹男子恒之助儀、当丑拾六歳罷成候処、幼年之砌

癩症ニ而時々差塞難儀仕候付、手医師共薬相用種々養生相尽候得共、去ル亥年夏以來別而相募、強差塞候節は言語も差悶、難治之病症ニ而往々全快可仕体無御座候旨申聞候付、一類共遂相談候処、私家督相続仕、御奉公可相勤体無御座候、尤於其身も同様之存寄ニ罷在候、依之退身之儀奉願候、以上

慶応元乙丑年五月七日

御名御印御据判

本多美濃守殿

水野和泉守殿

松平伯耆守殿

阿部豊後守殿

松前伊豆守殿

松平周防守殿

奉願候覚

高三万石

養方従弟実甥

居城但馬出石

仙石讚岐守

当丑四拾六才

養方厄介伯父実兄

土岐兵庫死悴

土岐鋭雄

右鋭雄父兵庫儀は、私父越前守死四男ニ而、私

儀兄美濃守順養子ニ相成候節、兵庫儀病氣ニ付

順養子不奉願、厄介ニ仕、鋭雄出生之節父

共私方江差置申候、尤父存寄有之、本姓為相名

乗置申候、

私儀当丑四拾六歳罷在候処、妾腹男子恒之助儀病氣ニ

付、奉願退身仕候、然ル処外男子無御座候付、養方従

弟之統を以書面、鋭雄儀私養子ニ仕度、奉願候、以上

慶応元乙丑年五月十三日

御名御印御据判

(宛名は廢嫡願と同名につき省略)

四〇 長防処置につき、領内警備強化令と見張番所

(慶応元年十一月十二日)

一御達書写

仙石讚岐守

長防御所置御取懸相成候ニ付、胡乱之者京師江入

込候茂難斗候間、其方領分京地江之街道筋は勿論、

間道枝道迄茂枢要之場所江番所取建、人数差出置、

往來人改方嚴重可致候、尤時々為見廻御目付被為
差遣候間、可得其意候、

十一月

一 左之通、御用人江申談

久畑村
米地村
福居村

右之ヶ所江御足輕式人も為見張相詰候様申談置候
処、最早不及差出旨、

(慶応元年十一月十三日)

一 京都表之御達之趣ニ付、左之通見張番被仰付旨、御
目付を以申談、
河原町口

式人ツ、不明様
相詰候事

村山英介
永井庄八郎
依藤左右藏
浅村吉太郎

但、右一ヶ所ニ御中間
七軒町口(四人、氏名略)
壹人ツ、相詰候事
和屋村(三人、氏名略)

一 左之通、御郡奉行江申談

藤ヶ森 宵田村 小野村 市場村
西谷村 奥野村 福見村 奥山村
村役人・番人

右此度京都表之御達之趣ニ付、右之口々罷出、メリ
筋可致事

(慶応元年十一月二十三日)

一 左之通被仰付旨、向々江申談候様御用人江申談

久畑村
藤ヶ森村
荒木村
和屋村

右三ヶ所江番所御取建之事

此度は和屋村へ
見張番出張ニ付
奥山村へハ止ニ
申談事

但

廿四日ニ荒木村一ヶ所殖、四ヶ所ニ相成

久畑村江

平士三人

御徒士式人

御足輕式人

御中間式人

藤ヶ森村江

平士三人ツ、

和屋村江

御足輕式人ツ、

御中間式人ツ、

川原町口

御足輕式人ツ、

荒木村江取建ニ付此処ハ止メニ申談

七軒町口

大銃一挺ツ、

鉄砲五挺

三道具一組ツ、

棒、捕縄共

幕、高提灯

久畑村

藤ヶ森村

和屋村

四三 生糸改につき、幕府達書（慶応二年正月二十二日）

（正月五日到来）

生糸之儀、近来売捌方賑々敷相成、諸人難渋之趣を聞候ニ付、今般御取締之為、諸国生産元方支配御代官ニ於て、御料は勿論最寄小給所神社領之分共相改、御預り所之分之内銘々役場ニ而取扱、為登糸又は掛元遣用其外外国行之分とも夫々改印致し候筈ニ付、都而改を受、実意に取引可致候、尤右改方手数料として糸荷豊数ニ応し夫々口糸取立、小給所神社領之分は諸入費引去、其余地頭江被下万石已上領分之義者改印御貸渡可相成候間、都而御料之振合を以領主ニ而相改、手数料も所務致し、右取立高之内相当之冥加相添、改相済、口々仕訳表一同年々六月・十二月両度ニ、最寄御料改所江可被差出候、然ル上は是迄横浜行之分江戸問屋共方ニ而相改ニ仕来リハ以来御廃止之儀と相心得、委細之儀者最寄御代官江可被承合候、且蚕種紙之儀も近来不順之もの猥ニ製作売買致し、養蚕之者共難儀に及候趣相聞候ニ付、是亦生産元方御取締之為、国々支配御代官ニ於て、御料・私領之無差別、其節取扱候者之内

二 御用部屋日記

肝煎申付、元紙漉立候場所へ買集、改印之上、蚕種製
作人共江相渡候旨ニ付、何連も右改印有之元紙江種仕
付、銘々国所名前書記し、正路ニ取引可致候、遠外国
行之分は製作出来之品最寄御代官江差出、改印を受、
相当之冥加相納候義と相心得、已来生糸并蚕種紙とも
改印無之品一切売買致間敷候、若心得違之もの於有之
は、其品取上急度可申付もの也、

十二月

右之趣御料・私領・寺社領とも不洩様可被相触候、

四三 初午時の城下見廻りは廃止

(慶応二年正月二十八日)

来月四日初午之処、当年御趣意有之ニ付、追手御門前
江神輿渡御、都而昨年之通夫々江申談候様、尤御城下
入口五ヶ所見張番并町方見廻り等之儀ハ御止メニ相成、
追手御番所御番士丈ケ被差出旨、御用意之儀向々江申
談候様御用人江申談、右之趣相心得候様、并追手御番

士人別取調候之様、御目付江兼而申談置候之処、名前
差出、

(御番士本間男之丞以下一四名の名前は省略)

四三 仮番所設置令 (慶応二年四月十八日)

一 左之通被仰付候而人別取調差出候様御目付江申談

荒木村 平士三人

足軽三人

番人

一同所柵門之場所江仮番所取建候事

和屋村 平士三人

足軽三人

番人

寺坂村 平士三人

足軽三人

番人

鳥居村 徒士三人

足軽式人

番人

丹生浦 平士三人

郷足軽不残

川原町口 平士式人

足軽式人

一 久畑村・藤ヶ森村見張番引取候事

一 左之通御郡奉行江申談

御領分

村々江

兼而申付置候通り胡乱之者共徘徊致し候儀有之候へ、早速最寄之番所并御郡奉行江可致注進、尤乱妨致し候敷、或は難差置所業等致し候族於有之而は、近村互ニ助け合、急度差押、其段可致注進常々近村役人共合締り筋入念可申事
右は此度従公儀分而御達之儀有之候ニ付、右之趣御領分一統江申付候間、急度相心得可申、万一心得違等閑之儀於有之而へ、其村役人共可為越度候、此旨

御郡中江早々可被相触候、

四三四 生系改め開始令（慶応二年五月一七日）

一 左之通両奉行江申談

町在江

先般従公儀被仰出、兼而相触置候生系改方、産物会所ニ於て改印被仰付候、尤手遠之場所は持出し方為難渋ニ付

出石産物会所

出石町分

下郷両組

山之中口組

米地四ヶ村

山之中奥組

養父郡

気多郡

美含郡東組

同郡西組

大庄屋元

同断

同断

同断

同断

右之通最寄場所ニ而改印有之候間銘々養蚕之生糸江

糸目何程

何郡何村何某

右之通糸之括江小札を付、前書最寄之場所江持出し

改を請可申候、其節

糸目拾貫目ニ付

口糸代 銀貳拾匁

秤口料 銀四拾匁

右之割合を以、糸目多少ニ不寄口糸代・秤口料共差

出可申候、右改方相済候上、勝手ニ売払可申候、

一 改場所江生糸持出し之儀は市日相定候積り、追而可

相触候、

一 右糸所持之分茂同様持出し、改を請可申候、

若し隠し置売買致候敷、又は遣用致し候共改印無之

糸取扱候ニおいては其品取上ケ、被仰付方可有之旨

兼而従公儀被仰出候儀ニ付、心得違迷惑不致様心得

可罷在候、

一 蚕種之儀、旬季も後れ候付、当年之処は種紙製作人

共々最寄御代官所江持出、改を請、種紙代銀之三厘

方、譬へハ永老貫文ニ付、永三拾文之割合を以、御

代官所江冥加として相納候様御達ニ付、若し種紙仕

付候もの共は其旨可相心得候、

右之通可相心得候、尤右は御代官所振合を以、被仰

出候儀ニ付、此上自然御模様替り之儀も候へ、其節

猶又可相触候、

四五 久美浜代官所警衛に派兵 (慶応二年六月朔日)

一 左之面々大書三之間ニ並居、御用番左之通申渡也、

(院脱カ)

御物頭

堀田反爾

大銃懸り

服部善左衛門

久美浜

御代官所江出張被

仰出候、依之御目録

被成下候、御場所柄之儀

万端入念相慎候様、

戦士

野崎但之助

本間勇之丞

亀井午太郎

増田慎三
渡辺八十太郎

棒

三ツ道具

幕

高提灯

武器并玉藁荷

御用人ノ申渡
賄役 堤 新平

弓削恭之助
村山喜太郎
早川和登理

手伝 □ 老人

小頭 老人

足軽 一組

中間 五人

馬 老疋

口付 老人

同役共急出張いたし候、右御領分境之儀にも候間、
右夏目村江向、御人数御差出し可被成候、右可得
御意旨新之丞申聞、如此御座候、恐惶謹言

六月十四日

後藤鑑三郎

林 伝一郎

菊地権作

磯野但見様

太田忠兵衛様

一 右ニ付、昨夜直様御郡組兩人右夏目村江差遣候由、
御郡奉行申達、猶又今朝足軽五人、御郡組兩人、差
遣候様御用人江申談、

四六 大屋市場村、一揆情況報告 (慶応二年六月十五日)

一 御郡奉行達

昨夜半生野御代官所ノ左之通書面相達候由、

一筆致啓上候、然者新之丞支配所但州養父郡大屋

市場村江其御領分同国夏目村境河原江去ル十一日

夜ノ多人数寄集候よし、右村最寄役人共訴出候間、

(慶応二年六月十六日)

一生野表ノ申来候大屋市場辺一件、為見聞早速小役之
もの差遣候処、兼而其辺江出郷罷在候御郡奉行磯野
但見ノ紙面差越、右一件は全く大屋市場限りニ而、
御領分江は聊も懸り無之、御心配筋ニは無之旨申越

候由、太田忠兵衛の申達、尤右書面も差出候ニ付、
同席中江順達差出、

四七 西の下谷、一揆情況報告（慶応二年六月二十七日）

一 西ノ下辺百姓共相集、追々乱妨久斗村辺迄罷越候由、
宵田村勘右衛門の郷宿米屋林藏方迄申越候由、御郡
奉行申達（候力）、右追々多人数ニも相成候由、且彼之辺
御領分も有之儀ニ付、御物頭一柳弥五作組子召連、
昼過早速罷越、其外夫々当御領分内取締之儀申談、
御代官宮原弥兵衛差出ス、

一 今昼申達候一件ニ付、早速御物頭一柳弥五作、御代
官宮原弥兵衛及出張候処、出張先の夜ニ入申越候書
面太田忠兵衛の差出候処、騒乱一条段々及尋候処、
元芝村弥惣次と申もの散田子の事起り、最初五拾人
斗寄り集り、同人家へ押寄、元米酒造家ニ而酒価拾
匁ニ致し、且又米値段も一統難渋筋ニ相成候哉、夫
等根元と相成、彼是申内乱入致し、酒桶拾石入の拾

式石迄之内八本破り、夫の荒川之八郎左衛門へ罷越
可及乱妨心得之処、手を入候ニ付聞届、其儘差置、夫
小篠垣弥兵衛方へ罷越相潰し、夫の知見（新左衛門
八郎右衛門）
も右同様、伊府村三軒取潰し十戸村清太郎右同様ニ
致し置、追々御領分中江も可罷出杯ニ申居候由ニ候
得共、評議も替り候事哉野の奥ノ方へ唯今罷越候由、

（慶応二年六月二十八日）

一 気多郡出張先の左之通申越候由、磯野但見申達、弥
五作并弥兵衛の書面差出候処、大意左之通、
弥五作并弥兵衛七時過江原村江着致候、間もなく久
斗村江多人数相集り暮時比ハ追々江原村之方へ入込
之様子ニ付、弥五作ハ御土藏前江手組召連出張、弥
兵衛儀ハ弥五作之手組之者式人召連、弥布村（弥）之方へ
罷出居り、此方のハ何も不申出、併村役人のハ内々
願出、決而御上様江御纏れニ相成候様之事ハ不仕候
ニ付、村役人之懸合相成候様押而相願、右之応対ニ

米価西ノ下奥ニ而ハ百五拾匁ノ百八拾匁迄ニ而相對
相濟候付、当所ニ而も同様ニ致シ呉候様申出、右応
接中村外レ車屋江及放火候付、弥五作ノ其筋相糺候
処、右ニは返答ニも困り候由、併何分荒立候而も不
宜、臨機之取斗致^{(舟)以下同}し居候由(此書面ハ廿七日夜
四時差出、廿八日晚達)
一 右申達之内ニ幕・高張等差立之儀申越候ニ付、左之
通相廻し候様御用人江申談、

幕 老対

高張 三本

外ニ竿斗り五本

右之通気多郡出張場相廻し候様

一 久美浜出張堀田反爾より左之通申来

然は当御支配所一昨夜ノ村々騒立、追々多人数相集、
人家十軒余も打潰、猶統勢之模様相聞候付、当御役
所ノも今朝金沢柔二・堀江東三郎、椒村迄出張相成
候得共、当出張之中ノも同所江出張取鎮候様、今朝
四過頃松井孝作ノ申談有之、尤当御陣屋も大切ニ付

人数相残候様申聞候間、別紙之面々出張申談候、且
又先方模様ニ寄候而ハ増人数と申場合ニ至候ハ、
出石表江出役先ノ可及御懸念間、其節は御人数差出
御座候様いたし度、此段私ノ其表へ申上候様、是又
被申聞候、尤豊岡江も同様之御沙汰今朝御座候ニ付、
若人数増と申場ニ相成候ハ、屯集之場所豊岡近ニ
候ハ、豊岡江増人数御沙汰可有之、其表近ニ候者、
其表江御通達可有御座候、且又成丈穩便取鎮候様御
積り御座候付、畏候得共、万一強勢ニ押懸り手余り
候模様ニも候ハ、無余儀打払殺傷も不厭^(御力)心得ニ
無之候而ハ取鎮も如何可有之哉申達候処、無余儀節
は臨機之取斗有之候様被申聞候間、戦士之面々江も
此段申談仕候、猶又右平穩ニ相成候迄ハ豊岡ノ来候
都而交代人数差出候とも、出石御人数御引取相成候
而は、此辺人氣動揺も難斗間、今少し不引取様是又
被申聞、一統へ申談仕候、

六月廿八日

別紙

本間勇之丞 井上半夫 野崎但之助 亀井午太郎

増田慎三 渡辺八十太郎 弓削恭之助

小頭老人 足輕拾人 中間老人

一同所々夜半又候相達候左之通

然は村々之騒立御役所ニ而も慥成事ハ不相分、出役筆沢・堀江も未た注進も無之候得共、追々増長之模様付、豊岡表へも御人数御差出、早々御取鎮相成様只今御代官達次郎様御家老へ之御書翰御差出相成候付、其表ニも同様之御達可有之処、私出張罷在候付、此趣御達御座候間、以急飛申上候、

六月廿八日暮

猶以当表ニも今晚中ニハ今朝出役之兩人が可申来候得共、未慥義ハ不相分、前啓申上候次第ニ而御高察被成下、御人数御差出方御斟酌可有御座^(説力)奉存候、別啓申上候、当方出役共今朝出立、椒村着之儀故、未模様も不申參、其余探索之向も碇と不申来、只

外々々色々々と越興等為申触し候様子、人数も千人と

も千五百人とも申候、今朝迄出役も無之、出石・豊

岡江御達も無之候、御手後れとも奉存候事□□□候、

今夕御代官御沙汰有之罷出、右御咄し御座候故、

何分早く御打消有之御手当御急務杯と御咄も有之、

又申上も仕居候処江瀬戸村平右衛門御代官へ申上

候而、追々増長故豊岡様此場ニ而防止候覚悟ニは

候へ共、用心致候様ニと大江甚助へ御沙汰有之趣申

越候ニ付、弥増長と申訳ニ而豊岡へも急々御人数差

出之御模様相伺申候、当方へは其表之御模様少しも

相分不申候ニ付、御人数御差出ニ相成候儀哉、又二

番手迄御繰出し之事、巷説も重く、又当御出役御

達有之哉、又今日出張之戦士御増人数申上候哉、

定而其御手配は御座候事ニ可有之奉存候得共、当方

ニ而は一向相分不申ニ付、本文之御達御座候儀ニ付、

左様御承知被成下候様奉存候、

六月廿八日暮

四六 番所見張番、一時休息(命令) (慶応二年七月二十日)

和屋村
荒木村 見張番
鳥居村

右当分为休息引揚候様、尤御足輕ニ而是迄之通御締り筋殿重ニ致し候様、

丹生浦見張番

右当分为休息引揚候様、尤跡之処は大夫什藏郷足輕共

ニ而殿重ニ御締り筋致し候様、御郡奉行を以申談、

四九 洋銃用いる時は、洋隊象らずしては其功薄し

(慶応二年七月二十二日)

御軍役之儀、従公儀被仰出候廉も有之候ニ付而ハ、成丈ヶ人夫等無用之失墜御省キ被遊度、兼而之御趣意ニ候処、近比中国筋出勢之諸侯方ニ於ても殊之外簡易成御人数立之趣、何様かゝる時勢ニ而は必用之外ハ断然御省キ可被遊思召ニ而、御軍制之儀格段簡易之御所置

ニ被遊度、素より当節一般銃隊ニ相成、其功不少、是非洋銃を不相用候而は不相成時勢、洋銃を用ひ候時ハ自つから洋隊を不象候而ハ其功薄く、^(旁力)旁以今般御軍制御変革ニ而洋隊取交、専ら精兵而已被差出候様可被遊御趣意ニ而、御旗本御道具類を始格外御減少被遊、依而は御家中下人并夫人等可成丈無用之失墜相省、必用之器械充実ニ被遊度旨被仰出候事ニ候間、一統厚く相心得上下一和忠勤相励候様被仰出候事

七月

四〇 甲冑にかわり輕便服装着用のこと

(慶応二年八月五日)

一 左之通御目付江申談

世上一般砲隊ニ而専ら砲戰と相成候付而は甲冑之功多分無之ニ付、當時御用ひは無之候間、其旨一統相心得、銘々申合簡易輕弁^(便)ニ而自由之働相成候覚悟肝要之事ニ候、乍然甲冑之儀ハ本朝ニ於て重器と相成

居候事ニ付、時勢変易ニ寄り候而ハ相用候儀も可有
之ニ付、常々相嗜可申事

右之趣御家中江各々可相達候、以上

八月五日

乗竹 弼

御目付中

四三 銅・青銅の器物献上 (慶応二年八月十五日)

一 左之通御馬廻式番組世話口上書差添献上致し候旨、

御用人申達之

一 銅・青銅之器物

壺台

一口上書左之通

私共儀、以御陰重代奉蒙御厚恩、今日ニ至り候迄浩

昇平之御恩沢、高臥安眠任、冥加至極難有仕合奉存
候、然処時勢変革仕、追々切迫之程茂難斗御座候得

は、御武備御充実之上ニ茂大砲等猶更被遊御手厚度
思召候哉ニ奉恐察候得は、一統家財等相省、如何様
ニ茂仕、御給費ニ茂可相成品を茂献上仕度存込候得

共、別而致方茂無御座候付、薦芹之微誠を申合、今

日相用候品々ニ而旧物之段幾重ニ茂奉忍入候得共、

銅・青銅之器物相省、其儘献上仕度奉存候、何卒大

砲御鑄製御給ニ被成下候得は、冥加至極難有仕合奉

存候、実平常御厄介筋ニ茂相成居候事故、取求候品

を献上仕候事は難仕御座候付、右旧物ニ而恐入候得

共、赤心之微誠と思召、推察被成下、不苦候得は宜

様奉願候旨、

八月十五日

御馬廻

式番組共

一 御用人達

一 大金 三ツ

小役人共
御徒士
御門番

右此節柄時勢何れ茂恐察致し、聊御軍備之端ニ茂被
成下候ハ、難有旨口上申述、献之候由、

一 右献上之両品共御側御用人を以、上江入御覽候処、
何れ茂奇特之至殊勝之事ニ被思召候段被仰出候付、
其旨申聞候様御用人を以申聞、

四三 大砲製造のため、銅・唐金類差し出しのこと

(慶応二年九月十三日)

一 左之通申談候様御用人江申談

諸御役所江

今般大筒御製造有之ニ付而は、御預ケニ相成候御道具之内、銅・唐金之類右之御足しニ可被仰候間、早々取調、差出可申事

四三 銀札切手発行 (慶応二年十二月二十七日)

一 左之通兩奉行江申談

町在江

銀札払底、諸向難波之趣相聞候付、来卯三月限り銀札切手差出候間、銀札取交、無差支可致通用候、尤引替之儀は銀札通り於産物会所引替差遣可申事

四四 銀札切手継続発行 (慶応三年七月十日)

一 左之通兩奉行江申談

銀札払底ニ付、諸向難波之趣相聞候付、旧臘差出置候銀札切手、猶又差出候間、当分之処銀札取交セ無差支可致通用候、尤引替之儀者銀札通産物会所ニ於て引替差遣可申事

四五 牧牛養育方教導につき、幕府触書

(慶応三年九月二十六日)

御同席触写、九月十三日到来

大目付江

今度但馬国村々牧牛之儀被仰出候付、右牛養育方其外主法筋之儀、広瀬九泰村々廻村之上、教導致し候筈ニ付、右主意之趣厚相心得、万端不都合之儀無之、往々御国益相成候様、村々之者共江可被申渡候、右之趣但馬国御領・私領・寺社領共不洩様可被相触候、右之趣去月廿四日於京地相触候間、但馬国領分知行有之面々江可被達候、

九月

四三 仙石銳雄政固、養父久利へ極秘親書を呈上

荒木家文書 吉祥寺管理

(表紙)

極密之書

政固君之御趣意

恒泣血して
相写ス

一 第一君臣之名義御正し被遊度奉存候、右は是迄思召込之御儀も可被為在候得共、愚昧之私、勿論大道茂弁知不仕、此上忠孝之道ニ戻候而は人面獸心とも可申、幾重ニも奉恐入候間、何卒御討論御教諭蒙度、愚存奉申上候、

一 公辺より御朱印御頂戴、御目見御家督之節も太刀目録其外御献上物等も被遊候上は、君臣之義明^(儀以下同)了確然たる幕臣と奉存候、

一 皇国中古已前土地人民^(ことごと)尽^(ことごと)く御保被成候天子と、只今之天子とは格別相違仕候、当天子は乍恐御隠居御同様之儀ニ而、政權武門ニ歸し候後は、古人之所謂權虚器と被申候通り、天子之御名目は御座候得共、天子之土地人民は皆徳川、凡武徳を以我が有とする□ニ而、天子之御自由ニは不相成、賞罰点勝茂天子之御自由ニは難被遊候、右之大権御自由ニ難被遊候ハ、詰り天下を被為守候神と奉存候、徳川家を実之主君と奉存候間、大道決而動キ不申と奉存候、

一 天子は將軍之君、將軍は諸侯之君と奉存候、

一 詩経ニも晋天卒土皆王臣王土之趣と申述候得共、是等皆土地人民山城一国ニ限^(候力)□天子之例ニは相成不申と奉存候、余論茂御座候得共省文仕候、

一 天下之土地は天子之御所持被遊候様ニも相聞候得共、神祖天下を御掌握被遊候上は、天下之土地徳川家之ものニ而、天子之ものニは決而無御座と奉存候、

一 將軍は天子ニ代り天下を御治被成、天子より御委任

被成候ものの様ニ候得共、天子より徳川氏へ天下を委任すると被仰付候例無御座候、神祖武徳を以て乱賊を御戮定被遊、仁徳を以て人心を御懷柔被遊、英雄・豪傑茂皆神祖之麾下ニ伏し、賞罰点勝神祖之思召ニ背くもの無御座候、依之天子より將軍之官を被授候事ニ候は、天下を御委任被成候と申儀ニは無御座^(候カ)□、征夷大將軍は鎌倉以来、天下を掌握致候ものゝ名と相成候得共、元來將軍と申は武官之司ニ而、兵権は掌握致候得共、天下之政權を主^(マツ)る者之名ニは無御座候、右ニ而勘考仕候而茂是非徳川家は主君と奉存候、

一 諸侯とても土地を徳川家より被下候故、随而爵号も御座候事ニ而、爵有而然後土地有ニは無御座、土地有之然後爵茂御座候事ニ而、土地之方大切と奉存候、右大切之土地は徳川家より被下候事故、主君□立^(カ)不申候而は名儀^(儀)ニ背申候、

一 外様御譜代之差別ニ而、御譜代は幕臣、外様は王臣

之様ニ心得候族も御座候得共、以之外之事ニ而、右之差別は御創業時分之儀、今日ニ至候而は外様とは被唱不申候、祖來翁も三代以上は外様とは不被申と論し被置候事、確論と奉存候、乍併公辺より外様之名目其儘被差置候上は、無是非事ニ御座候得共、矢張旧例を其儘被差置候迄ニ而、別ニ深キ御子細は御座有間敷、御家ニ於而茂御広間番士を外様と唱候得共、皆一樣之御家來ニ相違無御座候、公辺とても右と御同様之筋と奉存、譜代外様之差別無之筈ニ御座候、況や三代將軍已來諸侯を迎る之礼を廢せられ、君臣と相定り候上は、只今君臣之差別ニ一点之格を置へき義ハ無御座と奉存候、

一 御家之義は、御先祖様格別ニ被為蒙神祖之御寵遇候以来、私ニ至候迄、飽食暖衣仕候儀は、皆神祖之深仁浴沢と奉存候、斯而式百余年之御洪恩ニ被奉浴候上は、乍恐御父上ニも御身命を御抛被遊、徳川家を御輔救不被遊候而は御忠孝之道も如何哉と恐入奉存

候、徳川家を御輔佐被遊候得は、則天下之御忠臣無
 此上御儀と奉存候間、何卒右之大御着眼不被為失候
 様奉祈候、然処此度御上京被遊候上は、御朱印之儀、
 朝廷より被下置候御場合ニ茂押移り可申、左候得は
 私愚考仕候処ニ而は差当り御譜代御願可被遊を至当
 と奉存候、乍併御譜代ニ而も天子ヲ御朱印御出しと
 申事ニ相決し候ハ、御朱印御爵位とも御返上被遊、
 全徳川家之奴隸と御成被遊候共、天下へ被為對、決
 而御恥辱と申儀は無之、却而大御忠節相頭れ可申、
 勿論右之場ニ至候得は、御家来は不殘御暇可被下と
 御覚悟被遊候上之御儀と奉存候、是徳川家江之御忠
 誠貫徹之御上策と奉存候、乍併又々再考仕候得は、
 壯年之私、奇抜之論ニ涉り、右之御英断、乍恐如何
 と御案事申上候間、万々一御朱印朝廷より被下候御
 場合ニ相成候得は、先一応幕府江御伺御差図之上ニ
 而御頂戴被遊候共、可然哉ニ奉存候、然ル上は、私
 義は何卒幕之奴隸ニ相成候とも少も頓着不仕、御先

祖以来之御大恩、乍不及私一身を以て奉報度、実ニ
 今日ニ至り、父子之恩愛を割裂仕候義は不恩儀ニ御
 座候得共、忠孝之大義ニは難換、一時ニ父子之大倫
 を割候は不孝之様ニも相聞候得共、詰り御先祖様よ
 り被伝候御家を、永富山之安きニ奉置候得は、無此
 上大孝之道ニ相叶可申と奉存候間、此上之形勢ニよ
 りては、右之御覚悟御英断被下度、実ニ宗也齋様と
 法光院様(仙石忠政)と之御場合と奉存候間、只今より右之御決
 心偏奉願上候、茂早私儀は此処ニ断然と決心仕候事
 故、如何様之事出来、下々より如何様ニ申出候とも、
 此決心は動し不申候間、此上は御父上様御決心のミ
 奉祈候、右ニ付只今私掃部之儀杯、外々より如何程
 申上候共、決而御採用不被遊、泰然自若御動揺不被
 遊候様奉願候、実ニ只今父子東西ニ相分れ候は御家
 ニ取り無此上御盛運、私共迄茂無此上大幸と奉存候、
 此上之形勢ニよりては只々死のミ業罷在候事ニ御座
 候、

一 此度之御変事ニ付、御国許御手薄と被思召候得は、

此表ニ罷在候家来は不残差歸し、私は左右用弁致し候もの両三人斗りニ而、全く人質之心得ニ而当方ニ罷在候心得ニ相決し居候間、家来は^(以カ)御遠慮御召罷し可被遊奉存候、

扱々右様之儀御相談申上候場合ニ相成、平日之覚悟とは乍申、実ニ恐入候御時節^(マ)菅之心地仕候、明日出便ニ付、夜中取急認候間、御積り被遊兼候処多く可有御座候得共、宜敷御判読、心情御諒察被遊被成下候得は、難有仕合奉存候、

奉呈

家人膝下

政固泣血謹書

* 仙石政固は一八六三年(文久三)六月に出府、そのま
ま江戸に留まり、一八六七年(慶応三)九月六日に初
登城する。本親書は大政奉還勅許直後の一八六七年
十二月ごろに認められたのではないかと思われる。

四七 王政復古令發布に臨み、藩主御意通達

(慶応三年十二月十六日)

方今之形勢実ニ不容易御次第ニ押移、恐入候儀、上ニ於而茂深被遊御心痛候、申迄も無之候得共、勤王之御儀は飽迄御忠誠可被為尽は勿論之儀、徳川御家江被為対候而茂数百年之御恩分被為在候儀、是亦御尽力可被遊儀候得共、万々一心得違之者有之候而は不相濟儀ニ付、此段分而被仰出候、然ル上者猶更上下一和致し銘々忠憤を貯、兼々被仰出候通、何等之節不覚悟無之様相心得可申、聊動揺等無之様厚相心得候様被仰出候事

十二月

四八 京都留守居、藩主急速の上京を促す

(慶応三年十二月晦日)

廿八日夜達御用状左之通

然は此度御用ニ付、急速御上京被遊様申上候処、御直

書被成下、段々厚思召之処蒙御意、委細奉畏、彼是御
案思御心痛被遊候段、乍恐御尤様之御儀と奉恐察候、
猶各様もも細（委カ）（書カ）被下、夫々致承知候、□此度之
儀は実□御機会ニ而、若シ此跡□外□被
遊候而は、後々之処（マ）到幕共御首尾合如何共相成可申哉
と、此段も深く心見（マ）候義ニ御座候、今日茂有栖川
様ニ而内々申具候向有之、何分片時も早く御上京被遊
方専務と之模様承候へは、実以御遅に相成候而は相濟
不申儀ニ奉存候、此段は各様ニも得斗御推察候而、何
れも急速之御発駕と相成候様御尽力御座候様致し度、
当方之事情迎も以前通ニ而は行届不申候故右夜半立ニ
而急速源五兵衛相戻し、委細為御達候間、此段も御承
知被置、速ニ御決シ被遊候様御取斗御座候様奉存候、
今便は定而其表御発駕之御日限も被仰越候事と相待罷
在候処、其御模様無御座候段、実ニ心痛□不申、勿
論朝廷内御首尾合尽力之致し方無之、形勢は篤と御賢
察被下候而、猶急速之御一決、偏ニ奉祈念候ニ御座候、

伴 齋宮

猶以本文之趣、厚く御推察被下候而、何分ニも急
速之御一決ニ而、一日も早く御上京被遊候様、御
取斗被下度、其段幾重ニも奉祈念候、

四 鳥羽・伏見の戦い・戦況報告（慶応四年正月五日）

一 今晝御発駕相濟、御対面所へ出仕致し候処江京都表
昨四日辰ノ下刻渡し時廻し之別便相達候処左之通申来、
一 伏見表之變動探索仕候処、確説は分兼候得共、聞込
候趣左之通ニ御座候、
一 宮津御留守居方江大坂表申越ニ相成候趣へ、上様
三ツ頃御上京之御模様、御先手之衆既出立ニ相成候
由、然ル処、右飛脚上京之途中御人数数多相集、通
行も難相成由、併未戦争之模様ハ不見受候様申候趣、
一 伏見ヲ逃来候下輩之者申候ニは、会津様御人数着之
節、長州様敷、薩州様敷、会津様之陣所ニ火を懸ら
れ候事起り、大坂方之御人数薩州御屋敷を焼打ニ

被成、右御屋敷焼落候節逃出候趣、尤死人・怪我人
 多人数見受候由申候趣、

一 夜半頃高野ノ岡部庫次郎・金沢弥八郎・谷野惣太郎
 右三人、伏見街道稲荷之先迄為探索参り見聞之趣、
 左之通、

一 長人固之前通行致候処、相答候得共姓名相名乗候処
 無故障相通候趣、其処ニ首五斗有之、怪家人戸板ニ
 乗セ来候者も見受候由、

一 伏見表為報告上京致候薩人・宮津藩等之咄に、焼場
 を間ニ隔、両方ノ砲発候而、墓々敷合戦も無之、何
 れも夜明を相待候模様ニ而、玉ハ此先迄参候間、其
 場所見受候家々も夜中之戦ニ而一向不相分、阿ぶな
 きのミ故、最早先江被行候は御止メ可然旨申候ニ付
 罷歸候趣、荒増右之通之次第柄ニ而、事実相分兼候
 得共、今朝之模様相分可申、并昨夜宮津江得斗相頼
 置候間、先方之模様為知呉候筈ニ御座候、京都中ハ
 至て穩ニ而相替儀無御座候、以上

正月四日

渡辺新之丞

一 右之趣ニ付、御直ニ伺之儀有之候ニ付右来状持参致、

御用人
 服部弥五兵衛

西山平左衛門

右兩人、殿様御旅中迄罷越候様申談、猶又

御用番

仙石右馬介

右同様騎馬ニ而急速罷越、矢根村御小休ニ於て、上
 思召相伺、猶又評議之上、同所ノ江戸表并京都表江
 別便差立、一先ツ久畑村江御止宿ニ相成候事

一 上ニ者京地之模様御承知被遊候上は、猶更急速御上
 京被可被遊思召ニ而譬へ模様御見合ニ相成候共、決
 而自国ニは御休泊不被遊旨被仰出候得共、右馬介始
 平左衛門・弥五兵衛ノ無御余儀次第、得斗申上、御
 承知被遊候而、今晚久畑村江御止宿被遊候事
 一 暮時一応退出致し候処、夜又猶又京都表ノ一便相達
 候処、左之通申来、

但、昨四日昼後出、来状写左之通

一 然ハ今朝急飛を以申達候後、昨夜ハ大小砲之音頻り

と相聞候得共、一向勝敗不相分、京地は先々穩之旨、

市中立退并公家衆御輿方等者御立退御座候様子ニ而、

今朝書状ニ御軍装は元ハと相認候得共、御途中御着

衣之節は矢張御平服可然と奉存候、時宜ニ寄何時ニ

而も被召候様、御用意之方と奉存候、

一 参与御役所ハ御達左之通

仙石讚岐守

大政御復古ニ付而者、深厚思召之旨有之、各藩江被

命、彼是尽力之次第も候処、昨今ニ至り不斗茂坂兵

伏見表出張、突然兵端ヲ開キ、終ニ不可止之形勢ニ

押移候付而者、各名分条理を踏ミ、可勤王事は勿論

尚又追々御沙汰之次第茂可有之候間、其節は急度勉

勵尽力可致被仰出候事

但、登京出来候者速ニ人数随従上着可致御沙汰候事

ノ

一 左之通御目付江申談

兼而被仰出候通り、御不快押而御発駕被遊、久畑村

迄御旅行ニ相成候処、御持病之御眩暈気ニ而昨夜同

所ニ而御止宿被遊、今日は御滞留ニ相成り、御快気

次第同所御発駕可被遊旨被仰出候段申来候、此段承

知可有之候、右ニ付而は万事穩便ニ相心得可申事

右之趣御家中江各ハ可被相達候、以上

正月六日

仙石右馬介

目付中

(慶応四年正月七日)

一 御用人以上は御用部屋、老役老人之面々は太書院ニ

於而、昨夜中村八郎兵衛を以久畑村御本陣ハ被仰付

越候趣、左之通書取を以申聞ル、

但、太書院ニ而申談候様之処、御小書院ニ而申聞

口達覚書

(慶応四年正月六日)

此度之一条ニ付而は、一同格外ニ心配罷在候儀と御察し被遊候、上ニ者元々断然御決心被為在、御進退者其機ニ応し可被遊思召ニ而被為在候間、其段は一統も安心致し候様被仰出候、唯々御発駕此表之面々彼是動揺も可致哉之段、深く御案思御心痛被遊、拙者共江も急度被仰付越候儀有之、何分斯る時ニ祖、別而猶更一和精勤致し、聊動揺之儀無之様可相心得、御為筋と存込申出候は勿論之事ニ候得共、聊之義(儀)を彼是申出、却而御心配を懸候様ニ而は失本意様ニ可相成候間、其段得斗勘弁之上可申出旨被仰出候事、右之趣久畑村從御本陣、中村八郎兵衛を以被仰付越候事

正月

本間九郎次郎

右九ツ時過久畑村御本陣へ御使として罷歸、上ニ者近国諸家様御発駕之御模様等御承知被遊候而、今朝ニ而も御発駕被遊思召之処、御側御用人始御供之面

々が一応此表江被仰遊候上ニ而御発駕可被遊様ニと申上候而、右御使被仰付罷越候由、并兼而時宜出張被仰付置候御人数之外ニ、京都御固場出張被仰置候戰士之面々も被召連候段も被仰出候段、御意之趣と申達候付、長岡藤右衛門始戰士之面々早々出立候様申談、

一 右ニ付御旗本隊御供被仰付置候面々、早々出立、御途中江罷出候様申談、

桜井熊一

右京都表江罷在、京地之御模様并伏見刃戰爭等之模様等、久畑村迄罷歸達御聽候由、猶上ニ者一刻も早速ニ御発駕被遊思召、同席共江も御直書被成下、右持參熊一江被仰付候由、夕七ツ時頃罷歸御直書差出、并被召連候御人数之儀も被仰出候段申達、但、明七半時御供揃ニ而御発駕被仰出候段も申達

四〇 山陰道鎮撫總督、陣所への参陣を要請される

(慶応四年正月十一日)

一 薩藩之差越候書面写荒木助左衛門より差立、小倉忠見差出候、尤右色書も写相廻り候付留置、

此節京師為御守衛其地迄御人数御出懸相成候由、然ル処西園寺三位中将公山陰道鎮撫惣督之勅命を被為蒙、薩長因之三藩守護仕、当国御下向、今日笹山御発向之処大坂落去之逆徒追々通行いたし來候付、福住滞陣ニ而八方御手配最中ニ御座候間、幸御藩人数も今日は速ニ福住江御繰出し相成候様有之度、御互ニ勤王之尽力此時ニ御座候間、此段拙者共々得御意候、尚委細は園部藩士御聞取可被下候、以上

薩摩少将内

辰
正月十日

黒田嘉右衛門

折田要蔵

須知御出張
仙石讚岐守様
御役人中様
当方返書

貴翰拜見仕候、然は今般讚岐守儀、奉従天朝之命人数引連罷出候処、此節山陰道為御鎮撫、御惣督西園寺三位中将様当国御下向、福住御滞陣ニ而福住迄人数繰出し可申旨御指図被成下、勤王之儀は御同様之儀ニ付、御紙上之趣、委細拜承仕、則讚岐守江申聞候、尤使者之者差出候間猶委細之儀は右御承知可被下候、右貴答如斯御座候、以上

正月十日

御名家来

荒木助左衛門

薩摩少将様御内

黒田嘉右衛門様

折田要蔵様

四一 生野代官所接收を命ぜられる

(慶応四年正月十三日)

一 河合寛吾出張先々老人早駕籠ニ而夜半頃着、寛吾

申越候趣申達其大略左之通、

寛吾儀遠坂表江西園寺様御先供之向着之趣ニ付、右江罷越候処、惣督之仁未着無之趣ニ付、少し見合候内薩州藩黒田嘉右衛門と申仁着ニ付、早速面会之儀申入候処、無程面会致し呉候付、此度御鎮撫御惣督様御通国ニ付而は、早々御途中江罷出御機嫌相伺、御用向相伺候様兼而主人ノ申付越候段申述候処、右者御本陣之方江罷出相伺候様申聞、段々御丁寧之趣挨拶有之由、然ル処生野御代官始追々散走之趣ニ付、右者少人数たり共急速差出、御代官并手代且ツ妻子共不洩様召捕、荷物等持去り候ハ、荷物も取押候様薩藩黒田嘉右衛門より差図有之候旨、委細書取之際も無之ニ付老入急速罷帰申達候段、急使之者申述候事

但、豊岡と申合人数差出候様、尤右ハ当方ノ申述候儀ニ差図有之段も申達、

四一 鎮撫総督巡国請書提出を命ぜられる

(慶応四年正月十六日)

一

岡部平馬

右西園寺御巡国先福知山表ノ夜五時過罷帰、左之趣御達書御渡有之候由、并服部弥五兵衛ノ御用状差出、尤御模様柄委細申達、御用向左之通、

唯今十六日御守衛役所ノ御呼出ニ付、早速弥五兵衛罷出候処、薩藩川南東左衛門ノ別紙御達書老通被相渡候付、早速在所重役共方江差廻し御請書可差出旨御請申置、御泊振り聞合候而平馬儀早追ニ而差帰し申候間、万端委細之儀ハ同人江中含置候間、御聞取可被成下候、

一 御請書は御重役ニ而御持参御差出被成、可然旨申聞候間、何卒御一人御出張御持参被成下候様奉存候、御達書上包奉書

仙石讚岐守殿	西園寺殿御守衛
御家老中	役所

今度 王政復古ニ付而は西園寺殿御下向被仰付候間、京師出兵相成候とも山陰道之儀は、在国は領主、留守之儀は一門家老之連印御請之証書奉差出候様、御沙汰之事

正月

(慶応四年正月十八日)

仙石右馬介

右福知山表ノ夜四時頃罷帰、西園寺様御本陣江罷出御請書諸大夫江面会ニ而差出候処、無滞御落手ニ相成、御進物御使者相勤候処、御進物無御滞御入納ニ相成、万端御都合能相濟、夫ノ長藩惣督小笠原美濃介と申仁江面会致し、何角之儀相煩候処、至極受も宜敷、都而無御滞相濟候段、乗竹弼宅江罷越申達、

四三 若殿様帰国願受理される

(慶応四年正月二十五日)

一 左之通御目付江申談

從江戸表御便有之候処、若殿様御儀御新造様御一所ニ御帰国之儀、去ル十八日小笠原宍岐守様江御届被差出候処、御聞届濟ニ付、当月廿五・六日頃、江戸表御発駕可被遊旨被仰出候段申来、恐悦之至候、此段承知可有之候、

右之趣御家中江各々可被相達候、以上

正月廿五日

仙石右馬介

御目付中

(慶応四年正月二十六日)

一 江戸御用向左之通

追啓本書為認候処江御留守居ノ御届面ニ承置候事、御請ニ而相下り候段申達候ニ付、右ニ而弥御届濟申事相成付、此上は一刻も早く御用意相整、御発途と

取急候事ニ御座候

二月九日

荒木頼母

一 御届面左之通

私儀在府被連奉報御厚恩心得御座候処、在所表近畿之儀ニ付、從京都表再三之召、無抛父讃岐守発途仕、并山陰道為鎮撫西園寺三位順国有之、旁以在所混雜難立行相成、其上運送相塞り私存意之程も難尽、在府家来迄及飢餓可申次第ニ押移候間、妻召連引取候様、讃岐守ヲ申付越候間、一ト先婦邑仕、時節相待〔承置候〕御報恩之存意相達度奉存候、此段御聞届可被成下候、

正月十八日

以上

御名

四四 鎮撫総督巡国、出石經由計画は取り止め

(慶応四年正月二十七日)

一 西園寺様御巡国先江出張之服部弥五兵衛ヲ書面左之

通申来、

然者明廿七日六ツ半時御供揃ニ而峰山御発馬、久美浜御昼、豊岡御止宿之旨御廻達御座候、

出石表へ御下向否哉、弥之処突留申度と御本陣江罷出、内々相探候処、弥出石表江者御出無御座、豊岡ノ気多郡御通ニ而関宮御泊之趣御座候、依而ハ宵田江原之内御昼、御本陣場所無御座と存し、生野御支配所ニ候得共、伊福・浅倉之内ニ而御昼ニと相伺候処浅倉と被仰出候、御城下御入込無御座候事故、責而御昼丈ケ成ともト存し相願出候事ニ御座候、

正月廿六日夜

服部弥五兵衛

四五 鎮撫総督への出石藩使の接待口上

(慶応四年正月二十八日)

一 岡部長左衛門

右暮時江原村ヲ引取、御通行も無御滞、昨夜豊岡表御使者も夫々相勤、何角都合宜、今昼江原村御小休

ニ而御領分之處聊無御故障相濟候段申達、

豊岡ニ而御使者之節御口上振

西園寺様益御勇健被遊御旅行、恐悅至極奉存候、此間は私人數之者引揚被仰付、一同御目見被仰付、其上頂戴物仕、重疊難有難有仕合奉存候、近領御通行被遊候付、伺御機嫌且為御礼、以使者目録之通献上之仕段、宜御披露被下度、御重役中様迄申上度旨、申付越候、

正月廿七日

御名使者

岡部長左衛門

四、久美浜・生野兩代官所支配地管轄を命ぜられる

(慶応四年二月四日)

一 京都表昨三日出時廻し便相達候処、左之通申来

然者今三日二条城太政官所江御幸御座候而東征御軍議被為在候旨、別紙之通昨二日御達有之候処、同夕方ニ至り御用之議御座候ニ付、今三日巳ノ刻太政官所江罷出候様内国掛り御達有之候旨、渡辺新之丞

申達、尤、上御召と申訳ニは無之御留守居御呼出し

ニ付、如何様之御用筋か相分り不申候得共、何分爲

御軍議初而御親臨之折柄故如何哉と存、然し先比より其筋江御内沙汰之儀も有之事故、余之御儀ニは無之と昨夜中茂緩里と相休不申、何所か気分落付不申候処、今朝新之丞儀二条城江罷出、歸り遅しと相待候処へ四ツ半時比罷歸、別紙之通徳川御領地之分并生野銀山等当分御取締被蒙仰候旨申達、誠に恐悅之御儀、年来君上ニ茂右辺之処御心勞被為在、依而者御同様彼是と日夜心痛罷在候処、右様重キ被為蒙勅命、此上茂なき恐悅至極之御儀、上ニ茂厚く御大慶被遊、直様在京之面々且高野出之面ニ至迄御屋敷江御呼出ニ相成、何連も御目見被仰付別紙之通御意有之、且御直書被成下、一同難有恐悅を賀し候事ニ御座候、且又右為御祝、御酒一同江被成下、皆々難有頂戴致し候ニ御座候、跡略ス、

二月三日

伴 齋宮

別紙写左之通

別紙之通可相達旨、参与衆被申渡候、仍而申入候也、

二月朔日

参与

役所

仙石讚岐守殿

京極下総守殿

京極佐渡守殿

大村丹後守殿

青木源五郎殿

谷 大膳亮殿

家来中

追而今日中必廻達返却可有之候事

御別紙

今般御一新ニ付、明後三日辰刻二条城太政官代江御

親臨被為在候旨被仰出候事

但、御幸之儀総而御輕便ヲ主と被遊、月中数ケ度御親臨

之思召ニ候間、猥リニ供奉等不相願様兼而申達候事、於

武臣茂供堂上同様、侍式人・僕二人可召連之事

二月朔日

仙石讚岐守殿

太政官代

留守居中

書記役所

御用之儀候間、明三日巳刻太政官代二条城江可

被罷出様、内国掛被申渡候、仍申入候也

二月二日

太政官御渡御書付写

仙石讚岐守

但馬国旧代官宮崎達次郎・横田新之丞是迄之支配地、
并生野銀山等御領ト相成候付、当分其藩江取締被仰
付条、万端取調早々太政官江可申出候事

於京都表之

御意振り

今般不存寄大任被仰付ニ就而者、何連も一和致精勤

委細之儀者書取を以申渡ス、

御直書写

今般不存寄重キ奉蒙勅命難有儀、何連茂嘸々難有可

存、右様重大之御役を茂被仰付候付而者、向後猶更、上下一和致し、身分相嗜、謹慎は勿論可致精勤、且人少之中故、格違ニ而も役儀申付候儀も可有之候間、兼而心得可罷在候事

二月

四七 久美浜・生野兩代官所受取方手筈

(慶応四年二月六日)

一

岡部平馬
御用向ニ付
加登

浅井小八郎

右京都表一昨四日出立、只今御着、御用状差出、御用向左之通

進啓此度之勅命、上ニ茂格外ニ御満悦被遊、御用筋御分り之上被為召厚く難有、殊之外御大慶被遊、惣体江御酒被成下、何連も万歳を唱難有頂戴致し候、一御取締リニ付、御領所并生野銀山御受取方之儀、不取敢差向之分書取を以今朝新之丞伺差出候処、附ケ

札之通ニ御座候間、平馬江得斗申聞置候、

一 生野陣屋江は何連菊之御紋御幕・御旗・高提灯等之類御出来ニ可相成、是又得斗取調之上可申達、其表も御取調之儀ハ早々可被仰下候、官軍ニは菊之御紋御旗・幕・提灯等ニ相用、昨夜も市中廻り之御方改り中候、

四八 兩代官所支配地、出石藩預かりは沙汰止み

(慶応四年二月十日)

一 京都表ハ猶又夜ニ入時廻し使相達候処、御用向左之通申来、

然者今九日巳ノ刻御内国懸リハ御留守居御呼出ニ付、太政官代江渡辺新之丞罷出候処、別紙御書付通被蒙仰候、

御書付之写

仙石讚岐守

但馬国元代官(生以下同)幾野支配地之儀、今般被仰付候得共、

兼而山陰道鎮撫使西園寺殿ヲ同所取締向之儀は、役方折田要蔵江御委任被仰付候儀ニ付、前件其藩江御達ニ相成候儀は追而西園寺殿帰洛之上御沙汰ニ可相成候間、夫迄之処は其藩取扱ニ不及候、尤幾野表非常守衛向は兼而可被相心得候事

(慶応四年二月十五日)

一 京都表ノ之時廻し便、御用向左之通

進啓御領御取締り之儀ニ付、去ル九日御達書之内、久美浜代官支配地之儀無之ニ付、猶其段相伺候処、生野支配地ト同様相心得候様被仰聞候段御留守居申達候付、其節得御意候積リニ而御座候処、此度被仰越候趣ニ而は全く御通達不致儀、彼是御心配ニ相成候様子、何共恐入申候前条之通、久美浜之分も生野と同様御心得、西園寺殿御帰洛之上、朝廷ノ御沙汰有之迄ハ御取扱無之様御郡奉行江も被仰談可被下候、

四九 出石藩士足輕・中間までの在籍人数報告

(慶応四年二月十五日)

一 京都表ノ之時廻し便、御用向左之通

進啓在家人数御書出一条、当方外並も内々為取調候処、色々ニ相成候得共、先ツ加様ニ致し候へハ相納候由ニ而、大凡之方宜と別紙之通取調、夫人等は入不申、足輕・中間迄之員数ニ而外ニ留兵と申へ、先ツ老人・病人・幼年等之類其外少々内輪めニ取調候事ニ御座候、且此上万一出兵等被仰付候共、高野村当村出張半隊位ほか他国江は差出兼候趣ニ腹ヲ据へ申立候様ニ御座候、左様不致而は国方守衛手配りも届不申、且数日之出張兵狼見繼等迎も、国力取続不申趣ニ申立候覚悟ニ御座候、

二月十四日

伴 齋宮

御届書三通左之通

覚

在家人数

一 式百拾老人

家老土
步行士

内

六拾八人

当屋敷江罷在

式拾式人

高野村江罷在

百拾式人

在所江罷在

三人

西園寺殿江附添罷在

一百九拾六人

銃卒並足輕

内

五拾六人

当屋敷江罷在

三拾式人

高野村江罷在

百八人

在所江罷在

右之外

七拾人

悴銳雄召連、江戸表々罷帰候

但、足輕共
三拾人

江戸屋敷江罷在

但、早々在所江引越候様申付置候得共、未着不仕候、

右之通 = 御座候、以上

二月

御名家来

嶋村懺甫

覚

一番頭

老人

一司令士

老人

一銃隊

三拾式人

一大砲

式挺

一附属人員

式拾六人

右一隊当時高野村御警衛場江差出置申候

右之通 = 御座候、以上

二月

嶋村懺甫

一子年以前鞍馬口市原村并下鳴口高野村御警衛被仰付

候付、右両所江人数差出、其後市原村御免 = 相成、

高野村者今以人数差出御警衛相勤申候、

一丹後久美浜陣屋為警衛人数差出、一応引揚、其後猶

又京極飛彈守家来と申合、当正月迄警衛相勤申候、

一但馬国生野銀山變動之砌、人数差出翌年春迄警衛相

勤申候、

一 北国筋浮浪之徒一条之節、領分但馬国藤ヶ森江固人

数差出申候、

右之通御座候、以上

二月

嶋村謙甫

5 御一新後の出石藩政

望〇 藩制改革令（慶応四年四月二十一日）

御家書付

先般京都へ朝政御一新ニ付、各藩も国政之旧弊一洗門

閥素餐之陋風を改革し、国紀更張致し候儀被仰出候付

御家ニ於而も聊思召被為在候御事、此度別紙を以被仰

出候、一同不都合之儀も可有之候得共、当今時勢之程

得斗察知勘弁致し、何時ニ而も戦地ニ打向候心得推究

致し候ハ、難堪程之儀も有之間敷ニ付、一同一和心を

合セ、御趣意之程押切相貫候様急度相守可申、尤人材

挙用之儀御家中微賤之者ハ勿論、農商之ものたり共、

御用途ニ相立候者は御挙用可被遊、其節ニ至、嫉妬偏執を抱キ不申様兼而心得可申旨被仰出候事

辰四月

一殿中

国事局

文武局

会計局

右三ツニ分り候間、伺達し右江可致事

但、委細は追々可被仰出事

（以下略）

望一 御城稻荷正一位神階勸請（慶応四年八月六日）

然者此度御城稻荷社之儀ニ付、夫々紙面之趣承知致し

并京田戸一右衛門罷越、面談之上委細承知致し候事ニ

御座候、何分先ツ一応は伏見迄罷越何角聞合可然事と

存し候付、直ニ当人彼之方迄差出候処、先方神主大西

三位江面会致し、御神位之儀委細承候処、別紙も差出

し、右之通之御取斗致し候由、御神位御請ニ相成候得

は、別段神人ニ而も罷出不申而は不相濟事哉相尋候処、右ニは及び不申、御詰合之御役人ニ而も宜敷候由、弥御神位御受と申は、極日を籠々候而も四日・五日は懸り御祀式不取行而は不相成候由、右之通稻荷社之儀は当地ニ何連之神社江も御位差出候事、決而何連江も外ニ關係致し候事ニは無之旨、右神主大西申候由、右ニ付而は別紙之通、御祀式取行可然哉とも存候処、戸一右衛門ヲ申候ニも委細之次第柄急飛を以申達候様被仰付候儀も御座候由申出候付、此段御伺之上猶又急々御左右御申越し可被下、早速御祀式ニ取懸り候事ニ付、早々御申越し可被下候、尤戸一右衛門ニ而夫々相濟、御神位も同人御請仕候而、万端宜敷旨も神主ガも差圖も御座候、將又吉田家も東作を以聞合候処、白川家・吉田家とも右等之御職掌御庁之事ニ付而は、右伺差出候而も御差図難及旨、松岡右近申聞候よし、右ニ付而は先日御神位被為請、且又朝廷ニ而も神祇官之御規則相立候上、又々其御達方可然御取斗相成候而宜敷事ニ

とも被存、先方ニ而差出候御安鎮幣料式之通ニ而、外ニ別段之御備物無之由ニ御座候、戸一右衛門着早々伏見迄罷越し、只今罷歸此段何分差急之儀、直ニ時廻しを以差出候事ニ御座候、御伺之上否可被仰下候様相待(ト)罷在候事ニ御座候、恐惶謹言、

八月四日

杉原三郎兵衛

伏見稻荷社神主大西三位ガ別紙

当稻荷本宮 正一位明神勸請由來御尋之趣承候、右当社之儀は上七社勸祭之社列ニ而、信仰之者江は分神勸請之神璽ニ正一位之神階書記可相授旨蒙勅許候儀故、白川・吉田両家は一切不相拘、天下公然之儀ニ御座候事

稻荷本宮

神主

大西三位

辰
八月

望三 御城稻荷神階奉納儀式次第

(慶応四年八月十四日)

一 左之趣夫々可被申談旨、御用人寺社奉行江申談

来十八日、御城内稻荷社 正一位御神階被為請、御神具御本社江被為入候節左之通、

久畑御領分境迄 御郡組 式人

十座ノ

御先私

町同心 式人

御跡相立候事

御徒士目付 壹人

御左右相立候事

御徒士 式人

但、町方名主も罷出可申事

追手御門ノ一旦表御門江被為入、寺社奉行御玄関

ニ而神具請取之、御書院ニ而御小納戸江相渡し、

御床江直、御拜礼相濟候上、元之如く寺社奉行御

小納戸ノ請取之、表御玄関ニ而附添人江相渡し、

御本社江被為入、夫ノ鳥居ニ而神具社人請取之、

御本社江安置仕候事

一 御玄関御式台迄御年寄・御中老・御用人御送迎之

事

一 殿中御送迎并懸り合之面々麻上下着用、其外平服

之事

一出仕之面々服忌御改之事

一 御本社江被為入候上、御備左之事

神酒

御赤飯

小鯛 壹備 但、生身式尾

右御台所ニ而御用意之事

一夜ニ入候ハ、献灯之事 但、昼之内は献灯無用之事

一 御当日、殿様・若殿様御社参被遊、左之通御初穂

御備之事

金百疋宛

一 御入殿之節、寺社奉行御寺社江相詰候事

一来ル十九日・廿日初午之節之通、於追手前御祭礼

仕、御家中・町・在共参詣之事

一 御入殿当日并十九日・廿日御祭礼之節共、初午之

通出役之事

四三 商法会所設立準備（慶応四年九月七日）

町在江

今般從太政官諸国之産物可取建旨御達も有之候付、於御当家も追々産物御取開キ、御領内并京坂江も商館被為立度御趣意ニ候、右付而は不限何品産物仕出し度者ハ、其趣法委細書取、町奉行所并産殖方江可申出候、御詮議之上夫々御差図可有之候事

町方江

今般鼻緒并笠根緒会所被為立度候間、右仲買并其職致し候者、品物不残会所江差出可申、私之売買堅く致す間敷候、若し心得違之者於有之而は吃度^(吃)可被及御沙汰候事

聖旨 久美浜県商法会所御用懸り任命

(明治元年十月十三日)

久美浜県左之通申来候由御郡奉行申達

出石町 三郎太夫
名主

米屋又三郎

西屋喜右衛門

藤森村

源太夫

赤鼻村

八兵衛

右者共江今般当県商法会所御用懸申付候ニ就而は、右商法之儀ニ付同人喚出候儀も有之、同人より其藩江申出候儀も可有之候、其藩も商法ニ関係致候儀者同人江可被相達候様致度、此段御心得迄ニ申入置候也、

十月

久美浜県

出石藩

追而同人勤中苗字差許候也

聖旨 鼻緒商人ら棕栢木干本献上

(明治元年十月十七日)

町奉行達

上田屋 勝 藏

魚屋 治 助

米屋 武 助

棕栢木 千本

油屋 治郎兵衛

鋤屋 金四郎

明石屋 庄三郎

桐野屋 幸助

右之面々以御陰鼻緒商売仕、追々売路も相開、手広ニ

売買仕、難有旨、右ニ付為御国恩、聊之儀ニ候得共、

右之通献上致し候由、尤拾ヶ年之間右之者ニ而世話致

し候段も申出候由、願之通申談之、

呈 出石藩江戸屋敷、所在地面積報告

(明治元年十月二十七日)

覚

上屋敷 西久保

一九千九百三拾壹坪

中屋敷 代々木

一三百坪

下屋敷 渋谷

一壹万千八百九拾二坪

右は此度被仰出御座候付、可相成儀ニ御座候は右三

ヶ所之内別紙絵図面場所式ヶ所拝領被仰付候様仕度

旨、在所表讚岐守申付越候、此段奉願候、以上

十一月十二日

御名内 手塚泰輔

呈 円山川通船につき、久美浜県通達

(明治二年正月二十三日)

出石藩

気多川筋通船之儀、所々ニ於而荷物積替致サレハ、通

船差拒候弊風有之趣、河海通利之道ニ戻り、以之外之

事ニ候、方今専水利を起し広く融通之道を開キ、遠近

有無文通偏く農靡之便利を可致世話御沙汰も有之候、

就而者向後当県商法会所鑑札所持之船者何処迄も無差

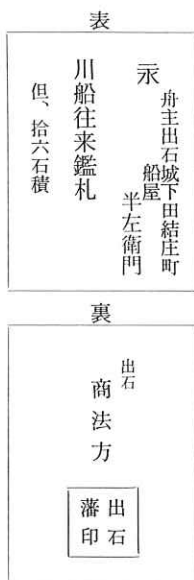
支、通船為致候間、右船川村々其節相心得可申者也、

巳正月

翌六 出石藩発行、川船往来鑑札

(明治二年正月二十八日)

今般川船往来之儀ニ付、久美浜県ノ通達有之候付、左之鑑札相渡候由、



翌九 出石藩商法会所設立 (明治二年十二月八日)

御新政以来、朝廷西洋制度之内、御国体ニ適合致候儀ハ御取用相成候付、商社之法モ追々相開ケ、既ニ通商為替両会所御取立ニ相成候間、於当藩モ右御体認相成、商社御取立ノ思召有之候、従来商社ト申ハ西洋各国普通ノ良法ニテ、其概略ハ先般於大坂府御刊行相成候為替通商二会社規則ニモ縷述有之、今更申論迄モ無之儀

ニ候ヘ共、規則書未タ行届居申間敷候間、其大略ヲ不為申間候テハ不相成哉ニ被存候ニ付、其一・二ヲ申候ヘハ、商人共申合仲間ヲ相結、譬ハ十人ニテ商社ヲ組合居候処、千両ノ品物有之、唯今買置候ヘハ十日目ニハ千五百両ニ可相成見込有之候ヘハ、十人ニテ百兩宛出シ合セ買込置、機會ヲ見テ売払、利得有之候上ニテ百五十兩宛配分致し、或ハ万兩ノ品物有之商社ノ内、一人買込度存知候得ハ、外九人ヘ申遣、九人ヨリ千兩宛差出、右ノ一人之ヲ請取、千兩ニテ万兩ノ商売致シ、売払候上ニテ利分ヲ己ニ取り、九千兩ノ金ニ相当ノ利息ヲ附ケ返済致シ候類ニ候、何レニ致シ候テモ十兩ノ持金ニテ百兩ノ商売ヲ致シ、百兩ニテ千兩、千兩ニテ万兩ノ商売ヲ致シ候仕組ニテ、実以便利最上ノ商法ニ候間、今般御組立相成候思召有之候付、有志ノ者至急ニ申合可伺出候、乍去銘々一人ノ利益ノミニ着目致シ、利アレハ進ミ、損アレハ退ト申様ノ次第ニテハ、迎モ法制不相立、社会不相統候間、第一社長一人、管事二

人被仰付度被思召候付、見込ノ人物有之候へハ、明九日九字迄ニ可申出、万一見込ノ人物無之候へハ、

社長

大橋又兵衛

池田澹治

河村又三郎

寺嶋忠右衛門

管事

鍋屋昌藏

岸田屋新平

鍋屋熊平

米屋林藏

内二人

右之通被仰出候、思食ニ候間、此段モ相心得、是非得

失無憚可申出候事

哭〇 諸株運上廃止 (明治二年十二月九日)

市中江

旅籠

油 蕎麦

右諸株運上断然御廃相成候間、望有之候者ハ爾来無差控開店可致候事

但、右之外タリトモ運上無之諸商売ハ、株一切御廃相成候事

哭一 八朔縄引、勝手に賑々敷相催すべきこと

(明治三年七月二十五日)

市中江

八朔縄引之儀、以来自町・他町村交り早朝ヨリ勝手ニ賑々敷可相催候事

但、場所之儀ハ藩士屋敷前タリ共不苦候事

哭二 毎月五日を定日に市開場を令する

(明治三年九月二十八日)

郡市江

此度通商会社ニ於テ広ク遠近有無之諸品ヲ集メ、金銀

貨幣之融通ヲ便シ、米・粟・布・帛ノ流布ヲ盛ニシ、
 市ニ礙品ナク、店ニ滯物ナク、^値価直ノ高下廉否ヲ均平
 センコトヲ要ス、ヨッテ各月五日ヲ以テ定日ヲ定メ、
 公明正大ヲ基礎トシ、權威私情ヲ打破シ、入札交易并
 ニ、セリ売等、正路ニ取計候様申付候間、管轄之内外
 ヲ不論、孤疑ヲ抱キ、猶予ヲ生セス、別紙品目適意ニ
 持出、盛ニ可營商業候事

但、品目略之

四三 村方役人、管内管理手続（明治三年十二月三日）

少郷正中江

- 一 諸談筋從役方少郷正江可申談候間、少郷正ヨリ同補
 助江申談、補助ヨリ分科村々江可申談候事
- 一 諸達・伺・願等大里正ヨリ少郷正補助江申出、少郷
 正補助是ヲ取調候上少郷正江差出、少郷正猶更篤取
 調、奥書致シ可差出候事
- 一 物成并拜借物取締方之儀、少郷正同補助立会取集、

少郷正ヨリ上納可致事

但、少郷正差支候節ハ補助ヨリ上納可致事

一年中小物成補助ニテ取集、少郷正ヨリ上納可致候事

但、同文言

一 物寄会并大割諸入用可為郷請事

但、古法ニ不拘屹度節儉相立可申候事

一 大割之節、村々取替物等委細書留、補助江差出、補
 助取調割入可致候事

但、村々大里正割帳江調印之上補助江差出、補助調印上

割錢取集可申、且益暮二度可致事

一 少郷正始村々年玉・年暮附届一切可廢止候事

一 補助出役賄一人ニ付、可為半人増候事

但、右ニテ諸入費可請切候事

右之条々篤ク相心得可申候事

四四 大郷正以下、正の字を長の字に相改む

（明治三年十二月八日）

郡市江

一 爾来大郷正・大市正以下都而長之字ヲ以テ正之字ニ可相改候事

一 爾来家内増減之儀、都度々々郡者大里長、市ハ大坊長江届出、月毎ニ戸口方江可相届候事

四五 大里長の下吏に伍長設置

(明治三年十二月十七日)

一 大里長之下吏ニ左之職々ヲ設候間、可相任人物至急相撰可伺出候事

少郷長江

大伍長 掌十五家

中伍長 掌十家

小伍長 掌五家

大市長江

一 少坊長之下、以下同文言

四六 郡市規則 (明治三年十二月二十七日)

一 劇場・角力・風呂屋男女混淆スマジキ事
一 人口増減月末毎ニ届出ベキ事

一 農商等并張札都テ従前ノ通タルヘキ事

一 曉六字迄(時)起、夜八字過寝ニ就ベキ事

一 職人・売人ハ店頭ニテ家業ヲ勤ムベキ事

四七 辰鼓楼落成 (明治四年四月十四日)

辰鼓掛り之者共

其方共儀辰鼓掛り申付置候処、都合之儀有之ニ付赦免候事

藩庁門衛卒江

今般其門衛江辰鼓令附属候条、此段可相心得候事

但、右ニ付、為心附并諸入費四石差遣候事

大市長

少市長

大坊長

外ニ

二 御用部屋日記

献上之者共

其方共儀、辰鼓楼造営ニ付、人足致猷人候段、神妙之至ニ候、仍テ今般落成ニ付、杜康式石五斗差遣候事

癸ハ 支庁名改称 (明治四年十二月十二日)

一 左之通豊岡県ヨリ申来

其支庁左之通可相唱候事

豊岡県支庁

出石局

辛未

十二月十二日

豊岡県

癸九 出石藩兵解隊 (明治五年正月二十八日)

兵隊称号廃止、附テハ廢置并給養等之儀、先達テ相伺追テ及沙汰候迄従前之通相心得可申旨達シ置候処、今般解隊之儀更ニ御達相成候間、給養之儀ハ当月限り致廢止候、右申達候也、

壬申正月廿七日

本県

三村方文書

『諸色記録書』川見禎一氏所藏

四〇 八幡宮氏子、伊福辺社氏子を離れるを差し止む

(天保六年)

一 天保五年午十二月ニ^(中村)当村八幡宮ニ^(施以下同)寄依之家別伊福辺

氏子を退んとする工^(金)有、其節村方役人ニ茂拔懸ケ

ニ而京都吉田表江罷出、御神名帳ニ御記し之儀を願

相叶ひ書附持帰り所持仕而申候は、此度野瀬妙見様

へ参詣仕候と偽り、京都宿屋ニ而他国々吉田表へ願

出候人有之、幸ひの事成と金百疋御冥加錢上候様申

候得共、伊福辺寄依之氏子之内ニは、不斗推察致し

候故、夫々村役人方よひ寄、段々利かいをとき、法

外不届之いましめを申付、八幡宮寄依之家別之者共

ニ誤りを為立、左之通之書附ヲ取置申候故、後々年

ニ至り故障出来仕候節、此書附ヲ以取斗可申事

京都へ参り申人

左五郎

伊右衛門

兩人参申候

口上之覚

一 此度当村八幡宮京都吉田様御神名帳御記し之儀奉願

三 村方文書

上候処、相叶ひ申候所、伊福辺氏子ニ相違無御座候
処、前々仕来り之通り故障ケ間敷儀は不申候、為後
日如件

天保六

八幡宮世話方
当村惣代

利右衛門[㊦]

未二月

伊右衛門[㊦]

八郎右衛門[㊦]

喜太夫[㊦]

当村庄屋

与惣左衛門殿

不動院兼帯

本沢寺様

四一 伊福辺社焼失 (天保四年)

不動院出火

天保四年巳六月晦日夜九ツ時

立物焼失

一 伊福辺明神社

式間半四方

一天神社

間中四方

一 稻荷社

老間四方

一 拝殿

四間ニ式間

一 寺

(行拾老間
横五間 但、湯殿付

一 土蔵

式間四方

一 木部屋

式間ニ三間

右之通之立物、悉一度ニ焼失仕候、

四二 伊福辺社再建 (天保十二年)

一 伊福辺社再建、天保十一子霜月ヲ始リ、翌丑五月廿

日・廿一日兩日石場突、九月上旬ニ相立テ十一月迄

ニ造作相済、霜月十八日夜丑ノ刻ニ御遷宮御座候而、

十九日・一日氏子中休日ニ致し、大般若経読、神子

神樂一日一夜御座候、賑々敷事候、

四三 代官、刈畑開発制限を令す (弘化三年)

刈畑之儀、前以被仰出茂有之候処、近年一統心得違致、

百姓之本業を打捨置、山上谷奥迄夥敷取捨、自然本田

畑手入等不行届、殊ニ山林切荒し候故大雨之節土砂押流し、出水度毎川床切、聊之小水ニ而も田畑江悪水走込、荒所出来、且谷々出水ヲ以養ひ來候田所及早損、水場之家難波相増候ニ付、旁以厚御趣意ヲ以去辰年畑畑役上納御用捨被仰出、向後為聊共畑畑致間鋪旨申付候処、右ニ而者耕作之余業聊夫食之助ニ致來候小前之者共難波之趣ニも相聞候ニ付、尚亦格別之以御仁惠以前之通許容之上、精々心得違無之様申付置候処、御趣意之趣致忘却、年増ニ夥敷致畑畑而已ニ力を尽し候族も有之趣、元來畑畑之儀ハ水吞・散田人身薄之者耕作之余業ニ少シツ、開發可為致候筈之所、近来ハ身元相応之百姓分迄茂水吞同様之所行ニ而、先祖ヲ讓請候大切之田畑手入等閑ニ致し置、目前之少利ニ心ヲ附、天理ヲ背候より重代之家督を取失ひ、水吞・散田之者共ハ聊之凶年ニ茂路頭ニ相立、既ニ去ル酉年之凶作ニ茂本業專相働候者共ハ、先ハ飢渴を逃、木売・畑畑等専ら力を尽し候者共、過半渴命絶家等ニ相成候者、元

百姓之本意取失ひ候故之儀、右等之処ハ村役人并長百姓共常々小前之者ともへ精々理解申聞、無油断農業出精可為致筈之処、等閑ニ致し置候段不埒之事ニ候、依之此節ハ村役人并長百姓立会之上、身分相応ニ場所割渡、名前・場所附帳面へ相認、当月中御代官へ差出可申、猶來未年ハ、春分之内前条之通取斗、五月迄ニ帳面差出可申、追々地方役御代官見廻り之節、場所可及見分、万々一村方不相応之儀於有之者、村役人ハ不及申、長百姓迄急度可及沙汰候、
右者其身分一己之為筋ニ無之、一国之損益ニ相拘り候儀ニ付、御趣意難有恐伏仕、小前々々ニ至迄不洩様精々申聞、心得違無之様取斗可申事

午(弘化三年)

五月

四四 不動院境内の内に、新四国八拾八か所勸請

(嘉永元年)

三 村方文書

嘉永元年申十二月ニ御上様江願書を以奉願上、御領分且ハ御城下近在繁栄為五穀成就新四国八拾八ヶ所勸請仕度由御願申上候処、翌酉ノ二月ニ願之通御聞濟ニ相成、直様氏子一統有増相談之上ニ而村方ヲ頭取道作りいたし、三月廿一日迄ニ道成就仕、八拾八ヶ所之所ヘ棒杭を打、廿一日道供養仕候、夫より追々信心之向ハ在・町共施主人御座候而、其年八月迄ニ追々大師様建立ヲ仕候、中村ヲ壱番掛ニ山の尾ニ休堂を立テ、式拾貳番之大師様建仕候、村方ト二ツ割ニ而寄進仕候也、

廿二番

弘法大師

村中ヲ施主

本尊

阿弥陀如来

川見与惣左衛門施主

前文之通休堂之大師様中村ヲ一番ニ寄進仕、夫ヲ追々近在信心之向ハ道も能作り大師様も寄進御座候、以上

四五

中村・下村、町分大庄屋支配への統合願

(嘉永五年)

(中村) 当村・下村兩村之處、山之中高・町分高兩高御座候処

山之中大庄屋・町分大庄屋兩大庄屋支配ニ御座候、且亦長砂村之儀ハ下郷御高・町分御高御座候処、町分大庄屋一方御支配ニ而中古ヲ相濟申候ニ付、兩村御百姓一統相談仕、大庄屋一方支配ニ御願申候、毎度四拾余年以前ニ茂弘原五ヶ村百姓一統相談仕、弘原五ヶ村百姓相談仕、弘原之處、町分大庄屋支配相願申候得共、其節ハ弘原五ヶ村故相叶不申ニ付、此度式ヶ村相談之上ニ而御願申候処、御聞濟ニ相成願書控ヘ何角書寫置申候、

乍恐奉願上口上之覚

下村・中村兩村之儀、從中古町分・山之中分と御高分ケニ相成候節、隣村長砂村之義茂町分(總以下同)・下郷分と御高分ニ相成候由承り伝ヘ申候、然ル処長砂村之義ハ兩御高并人別其外一切弘原町分大庄屋所御支配ニ御座候、下村・中村兩村之儀ハ町分・山之中兩大庄屋所御支配ニ御座候而年々不益之費も相立候ニ付、入用相嵩ミ高懸入用外村々よりハ多分ニ御座候而、御百姓共往古と

嘉永五年
子三月

違イ時節柄も悪敷相成、追々卑力ニ相成、買入肥し等も得不仕、地味茂自然と衰へ、作徳等薄相成申候、小前之者ニ而ハ作喰等ニ差支へ候ニ付、無抛山野之稼を專ニ仕、露命取続候故、段々地味悪敷相成、嘆ケ敷奉存候、其段御年貢上納等も仕兼候ものも御座候而、無抛立会之者他借ヲ以取替候処、当節ニ而は村借財多分ニ相成、必至と難渋仕候、何卒以御慈悲長砂村之通、弘原町分大庄屋所支配ニ被仰付被成下候者、聊宛多共年入用減少仕候而、往々地味取直し候様可相成と奉存候ニ付、右之段御願奉申上候、尤御公用之儀者何事ニ不寄是迄之通相勤メ可申候間、右奉願上候通被仰付被成下候は村方一統諸事殿敷儉約相立、農業専一ニ出精仕、追々借財片付候様仕法組立申度奉存候、何卒乍恐格別之御慈悲ヲ以右奉願上候通被為仰付被成下候ハ、一統難有仕合奉存上候、以上

下村百姓惣代 勘 兵 衛
同村組頭 磯 右 衛門

一 弘原谷五ヶ村、米地谷四ヶ村
弘原町分大庄屋 橋本小左衛門

工藤市郎右衛門様
渡辺仁左衛門様

同村同断 庄左衛門
同村庄屋 次惣右衛門
同村同断 利 兵 衛
中村百姓惣代 八郎右衛門
同村組頭 勇 三 郎
同村同断 新右衛門
同村同断 彦左衛門
同村庄屋 与惣左衛門

四六 御郡中仕法替えの事

(安政四年)

安政三辰十月廿一日
郡中大庄屋取締り庄屋不残呼出し被仰付候事

三 村 方 文 書

右支配触下ニ被仰付候事、乍併中村・下村之儀は五

ヶ年以前嘉永五子年ニ町分御支配ニ相願、子十一月

ニ被仰付置候事也、

一 土野六ヶ村、管谷^(管乙)四ヶ村

出石町分大庄屋 長良三郎太夫

右支配触下ニ被仰付候事

一 上村大庄屋横山吉郎右衛門・日野辺村大庄屋国村又

右衛門右両人大庄屋役御赦免被仰付候事

右両人之者共ハ桐野村福富甚太夫大庄屋役相勤申候

処、甚太夫難渋ニ相成、去ル寅年御免被仰付、其後

吉郎右衛門・又右衛門両人口組大庄屋年番ニ被仰付、

漸々兩人共大庄屋ハ三ヶ年之間之事ニ御座候故、暫

ク之間ニ御座候故、御赦免被仰付、口組ハ相つづれ

申候事

一 山之中口組之内八ヶ村は奥組左々木村大庄屋多根太

郎左衛門へ支配触下ニ被仰付候事

一 下郷両組大庄屋神床市右衛門・野村新兵衛兩人ニ年

番ニ被仰付候事

一 養父郡六ヶ村、気多郡五ヶ村、是も米里村利右衛門

・国分寺村文右衛門両人大庄屋年番ニ被仰付候事

一 美含郡兩組、是茂轟村平四郎、郡谷^(訓乙)村浅右衛門右兩

人ニ年番大庄屋ニ被仰付候事

其外取締り一組ニ而忒三人宛御座候処、是亦忒組合

一組ニ相成、兩組之内ニ而老人宛残り、兩人宛ニ被

仰付候事

右之通御郡中御仕法替願之儀は、中村・下村兩村先達

而去ル五ヶ年以前町分御支配ニ願相叶申候処、口組残

り之村々十七ヶ村ハ彼是申、兩村を口組へ引戻ス工風

願度々致申候ニ付、中村・下村発起願主御座候、猶又

日野辺村又右衛門・畑村善右衛門右兩人ト上村吉郎右

衛門ト少シ振り合之儀御座候而、其訳故中村・下村右

四人同腹ニ相成、御年寄様御三人江密々内分ニ而、下

方為筋之儀ヲ申立相願申候処、早速御聞濟ニ相成、御

郡奉行始御一家中へも一向沙汰なしニ而御仕法立被仰

付候事願主并ニ其節之御役人御執成之御衆中有増左ニ
記し申候事

發起中村・下村惣代
庄屋

川見与惣左衛門

願主人

日野辺村大庄屋

国村又右衛門

同断

畑村庄屋

井上善右衛門

取扱人

八木町出石町分大庄屋

長良三郎太夫

御取継執成人

鍛冶屋村

藤川市平

御役小頭御取立

右五人之者共辰三月上旬之頃願出し、昼夜心痛仕、
密々ニ而相談仕、日々替り々ニ相頼申候処、同年十
月廿一日ニ一統へ被仰付候事

御部屋御用番様

堀 鯉 助様

磯野 一 記様

岡部長左衛門様

四七 守札所持規則御触書写

(明治五年)

規則

一 臣民一般出生之見阿らへ、其由を戸長ニ届ケ、必神
社ニ参らしめ其神の守札を受け所持可致事

但、社参之節戸長之証書を持参すべし、其証書ニは生児
之名、出生之年月日、父之名を記し、相違なき旨を証し、
これも神官に示すべし

一 即今守札所持セざる者老幼を論せず、生国及び姓名
・住町・出生之年月日と父之名を記せし名札を以て
其戸長江達し、戸長よりこれを其神社ニ達し、守札
を受けて渡すべし、

但、現今修行又ハ奉公或は公私之事務阿りて、他所ニ寄
留し、本土神社より請け難きものハ、寄留地最寄之神社
より本条の手續を以受くべし、尤来申年正月晦日迄期と
すへし

一 他之管轄ニ移転する時ハ、其管轄地神社之守札を別
ニ申受、併て所持すへし、

一 死亡せしものハ戸長ニ届け、其守札を戸長が神官ニ

戻べし、

但、神葬祭を行ふ時ハ其守札之表ニ死亡之年月日と其靈位とを記し、更ニ神宮より是を受けて神霊主となすへし、尤別ニ神霊主を作るも可為勝手事

一 守札焼失又は紛失せしもの阿らハ、其戸長ニ達し、

其戸長其事実を糺して相違なきを証し改而申請へし、

一 守札を受けるにより其神社江納る初穂ハ、其ものゝ心任セ多少ニ限らざるべし、

右之通ニ候条取調相漏候得は、早々可届出候、尤不

審之廉有之候得は、神祇官へ承合候事

太政官

(明治四年
辛未七月)

三 村 方 文 書

今般大小神社氏子調へ之儀被定候ニ付而は、各地方管内神社神官之輩守札差出方左之通相心得、粗略之儀無之様取扱可申候也、臣民共出生児其土地之神社江参詣致し候者、戸長証書を照し其名前・出生之年月日及び

父之名を氏子帳に記し、左ニ雛形ニ随ひ守札を可相渡事

表

年月日
某所某神社氏子
何某
生国 父名 何某 男女

此寸法堅三寸、横二寸之木札を用ひ、中ニ其神社所用印を押へし

裏

年月日
神官 氏名印 同 氏名印

生児社参之日限は従前之通相心得へし、尤病気等は此限ニ阿らず、

即今守札所持セざるものハ其戸長が生国・姓名・住所・出生之年月日・父之名を記し、名札差出す時ハ守札を渡し、氏子帳ニ其名前を記し置べし

但、現今修行又ハ奉公或ハ公私之事務阿りて寄留するものも、本条同様相心得、無差支相渡可申、尤此日限ハ来正月晦日迄を限とす

他之管轄移転するものには、其移転セし土地神社の守札を別ニ渡すへし、死亡のものは其守札を戻すべしニ付、其由を氏子帳ニ記すべし、

但、神葬祭を行ふものニハ、其守札の裏ニ死亡の年月日、其靈位とを記し、更ニ相渡し、其時死亡の由を記録し、名前・員数共其管轄庁へ差出候事、当四月中に布告之通心得可申事

守札焼失又は紛失セしもの有て、其実を証する時ハ其由をしるし、別ニ渡し氏子帳ニ其由を記し置くへし、守札を受るニより其神社納る初穂は、其ものゝ心ニ任セ、多少ニ限らざるべし、

出生之児及び氏子入之數、其名前を録し、毎年十一月中其管轄庁差出し、十二月中ニ右之通管内大小神社へ可相達事

辛未

七月

太政官

別紙之通被仰出候条、其組合村々小前末々迄無洩落早々可相触候、尤式通相渡候条、一通ハ戸長へ相廻し、銘々可写置、一通ハ氏神神職之者へ相廻し、銘々写置当正月を限り無差支守札可相渡、勿論諸事不都合無之様可致候事

明治五壬申正月

出石局

四六 出石藩銀納御立値（延宝六〇慶応元年）

*次頁以下に掲載

三 村 方 文 書

出 石 藩 銀 納 御 立 値

年	米	大豆	史料	年	米	大豆	史料
1678 (延宝6)	匁 40.0	匁	高柳村米大豆通引付帳 (八鹿町公民館蔵)	1725 (享保10)	匁 41.5	匁 46.0	諸 色 覚 帳
79	50.0			26	39.0	34.0	
1689 (元禄2)	41.0	27.0		27	40.0	40.5	
90	37.0	28.0		28	36.0	34.5	
92	35.0	23.0		29	32.0	30.5	
94	35.0	33.0		30	31.5	31.5	
95	48.0	36.0		31	35.5	29.0	
97	46.0	33.0		32	62.0	39.0	
99	57.0	43.0		33	42.5	39.0	
1700	52.5	53.0		34	37.0	41.0	
1	61.2	50.0		35	37.0	31.0	
2	67.0	56.0		1736 (元文元)	51.0	49.5	
3	57.0	44.0		37	49.5	43.5	
1704 (宝永元)	54.0	45.0		38	83.0	85.0	
5	58.0	46.0		39	68.0	50.0	
6	63.0	48.0		40	79.0	79.5	
7	66.0	58.0		1741 (寛保元)	67.0	49.0	
8	60.0	47.0	42	59.0	51.0		
9	51.0	51.0	43	65.0	65.0		
10	57.0	55.0	1744 (延享元)	60.0	53.0		
1711 (正徳元)	58.5	50.0	45	66.5	60.0		
12	89.5	80.5	46	60.5	58.0		
13	133.0	94.0	47	62.0	65.0		
14	155.0	122.0	1748 (寛延元)	60.0	57.0		
15	116.0	103.0	49	60.0	56.5		
1716 (享保元)	129.0	131.0	50	53.5	45.0		
17	113.0	113.0	1751 (宝暦元)	49.0	40.5		
18	128.0	128.0	52	40.5	41.0		
19	39.0	39.0	53	43.0	41.0		
20	44.0	37.0	54	49.0	51.5		
21	54.5	46.5	55	84.5	51.0		
22	44.0	35.0	56	60.5	69.0		
23	40.5	38.0	57	56.5	63.0		
24	36.0	33.5	58	55.0	51.0		

年	米	大豆	史料	年	米	大豆	史料
1759 (宝曆9)	匁 53.0	匁 40.0	諸色管帳	1794 (寛政6)	匁 56.5	匁	冬小 城村 庭帳
60	53.0	42.0		95			
61	44.5	39.5		96			
62	50.0	47.0		97	63.5	63.5	
63	55.0	56.0		98			
1764 (明和元)	57.0	51.0	小 城 村 御 用 控 帳 ・ 下 勘 定 帳	99	60.0	63.0	八 鹿 町 中 央 公 民 館 保 管 文 書 よ り 算 出
65	62.0	72.0		1800	71.0	58.0	
66	61.0	50.5		1801 (享和元)	61.0		
67	65.0	58.5		2	62.5		
68	75.0	66.5		3	52.5	53.5	
69	71.0	53.5		1804 (文化元)	54.0	67.0	
70	63.0	61.0		5	49.5	58.0	
71	60.0	60.5		6	51.45	56.9	
1772 (安永元)	60.0	61.5		7	67.0	60.0	
73	57.0	56.0		8			
74	53.0	46.0		9	59.4	50.39	
75	58.0	56.0		10	56.5		
76	57.0	53.0		11	57.5	55.5	
77	55.0	50.0	12	52.5	53.0		
78	59.0	59.5	13	63.0	53.0		
79	52.5	51.5	14	62.0	54.0		
80	50.0	55.0	15	59.5	50.5		
1781 (天明元)	58.0		16	66.0	57.0	冬冬 御 用 部 屋 日 記	
82	77.0	62.0	17	57.0	56.0		
83	82.0	67.0	1818 (文政元)	53.0	57.0		
84	68.0	77.5	19	47.0	47.0		
85	61.0	73.0	20	52.0	51.0		
86	84.0	68.5	21	58.0	58.0		
87	66.0	80.5	22	58.0	62.5		
88	61.5	59.0	23	59.5	74.0		
1789 (寛政元)	63.0	70.0	24	67.0	65.5		
90	46.5	58.0	25	87.0	83.5		
91	65.0	68.0	26	57.0	71.0		
92	73.0	68.0	27	58.0	58.0		
93	79.5		28	78.5	65.0		

三 村方文書

年	米	大豆	史料	年	米	大豆	史料
1829 (文政12)	72.5	61.0		1849 (嘉永2)	100.0	85.0	
1830 (天保元)	78.0		御 用 部 屋 日 記	50	134.0	125.0	御 用 部 屋 日 記
31	72.5	57.0		51	84.0	82.0	
32	72.0	75.0		52	95.0	99.0	
33	90.75	67.5		53	92.0	119.0	
34	76.0	71.0		1854 (安政元)	90.0	110.0	
35	87.0	73.5		55	77.5	80.0	
36	146.0	104.5		56	74.5	81.0	
37	99.5	87.5		57	100.0	101.0	
38	130.0	120.0		58	128.0	106.0	
39	75.0	80.0		59	128.0	130.0	
40	66.0	78.0	1860 (万延元)	180.0	275.0		
41	77.0	82.0	1861 (文久元)	135.0	125.0		
42	69.0	72.0	62				
43	75.0	80.0	63				
1844 (弘化元)	75.0	68.0	1864 (元治元)	225.0	245.0		
45	85.0	74.0	1865 (慶応元)	427.0	400.0		
46	80.0	89.0	66	900.0	690.0		
47	90.0	90.0	67	570.0	440.0		
1848 (嘉永元)	86.0	84.0	68	76貫文	85貫文		

- 備考 1. 本表は12月に決定される「定納」分の立値である。但し、冬と注記してあるは11月中に決定される冬立小物成値段である。夏とあるは7月決定の夏立小物成値段である。
2. 享和元年～文化11年の間はまとまった史料がなく、年貢銀集帳・年貢銀算用帳などによって算出した。

